

# 聖徒の道

11  
1996



末日聖徒  
イエス・キリスト  
教会

# 聖徒の道

1996年11月号



表紙——これまで多くの芸術家たちが復活された救い主のニーファイ人への訪れを描写してきた。表紙の絵「キリストと『モルモン書』の子供たち」(デル・パーソン作)や裏表紙の絵「見よ、わたしはイエス・キリストである」(ロン・クロスビー作)もその一例である。この栄光に満ちた出来事を描いたそのほかの絵画が10ページ以降の「見よ、わたしはイエス・キリストである」に掲載されている。

こどものページ——11歳のヘンリックは、4人の弟たちの良いお手本となっているだけでなく、弟たちと大の仲良しです。14ページの「ノルウェーのリスタルムに住むヘンリック・アムンゼン」を見ましょ写真/ディエーン・ウォーカー。

## 一般

大管長会メッセージ——従順を通して得られる力	
第一副管長トーマス・S・モンソン	2
「その本は捨てないで!」	
アパレシダ・ヒメネス・デ・オリベイラ・パソス	8
「見よ、わたしはイエス・キリストである」	10
エリヤの霊 大管長ゴードン・B・ヒンクレー	18
奇しき御業	
マルセリーノ・フェルナンデス・レボヨス・スアレス	22
アフガンに込められた思い出 ジャン・マレー・スミス	32
喜びにあふれるプエルトリコの聖徒たち	
ラリー・ポーター・ガート	34

## 青少年

たった一人の生徒 ベアトリス・エステル・ペレツ・コルテス	17
必要なのは悔い改めでした クリストファー・チェトウィンド	24
平安を保つ タマラ・リーザム・ベイリー	26
つかまって! ジェームズ・M・パラモア	28
ジェニーの奇跡 ビクター・W・ハリス	46

## 定期特別記事

読者からの便り	1
家庭訪問メッセージ——	
キリストの力によって、何事でもすることができる	25

## こども

御言葉を心にたくわえなさい L・トム・ペリー長老	2
分かち合いの時間——じゅうぶんのひとだんじきけんきん	
カレン・アシュトン	4
ちいさなみんなのために——イエスさまをおぼえる	
ローザン・W・トルケ	6
約束の地へ向かうリーハイの旅	
ダイアン・デッカー	8, 12
かばんいっぱいの愛 レイチェル・ペイス・キャスト作	10
友だちになろう——ノルウェーのリスタルムに住むヘンリック・アムンゼン	
ディエーン・ウォーカー	14

本誌は、末日聖徒イエス・キリスト教会の公式刊行物です。本誌は以下の言語で出版されています。月刊——イタリア語、英語、オランダ語、サモア語、スウェーデン語、スペイン語、中国語、韓国語、デンマーク語、ドイツ語、トンガ語、日本語、フィンランド語、フランス語、ポルトガル語、ノルウェー語。隔月刊——インドネシア語、タイ語、タヒチ語。季刊——チェコ語、ブルガリア語、ハンガリー語、アイスランド語、ロシア語。

大管長会：ゴードン・B・ヒンクレー、トーマス・S・モンソン、ジェームズ・E・ファウスト  
十二使徒定員会：ボイド・K・バックナー、L・トム・ペリー、デビッド・B・ヘイト、ニール・A・マックスウェル、ラッセル・M・ネルソン、ダリン・H・オーグス、M・ラッセル・バラード、ジョセフ・B・ワースリン、リチャード・G・スコット、ロバート・D・ヘイルズ、ジェフリー・R・ホランド、ヘンリー・B・アイリング  
編集長：ジャック・H・ゴズスリンド  
顧問：スペンサー・J・コンディアー、L・ライオネル・ケンドリック  
教科課程管理部責任者  
実務部長：ロナルド・L・ナイトン  
企画・編集ディレクター：ブライアン・K・ケリー  
グラフィックスディレクター：アラン・R・ロイ  
ボーグ  
国際機関誌スタッフ  
編集主幹：マービン・K・ガードナー  
編集主幹補佐：R・バウル、ジョンソン  
編集副主幹：デビッド・ミッチェル  
編集補佐／こどものページ：ジェニファー・グリーン・ウッド  
工程管理：マアリアン・マーティンデル  
出版補佐：ベス・デーリー  
デザインスタッフ  
機関誌グラフィックスディレクター：M・M・カフサキ  
アートディレクター：スコット・バン・カンペン  
デザイナー：シェリー・クック  
制作主幹：ジェーン・アン・ピーターズ  
制作：レジナルド・J・クリステンセン、デニー・S・カービー、マシュー・H・マックスウェル  
予約購読スタッフ  
ディレクター：ケイ・W・ブリッグス  
配送部長：クリス・クリステンセン  
マーケティング部長：ジョイス・ハンセン  
聖徒の道1996年11月号第40巻第11号  
発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会  
〒106 東京都港区南麻布5-10-30  
電話 03-3440-2351  
印刷所 株式会社 リック  
定価 年間予約／海外予約2,400円（送料共）  
半年予約1,200円（送料共）  
普通号／大会号200円

Copyright©1996 by The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. All rights reserved. Printed in Japan. 英語版承認—1994年8月 翻訳承認—1994年8月 原題—International Magazines November, 1996. Japanese. 96991 300

●定期購読は、「『聖徒の道』予約申し込み用紙」でお申し込みになるか、または現金書留が郵便振替（口座名／末日聖徒イエス・キリスト教会 振替口座番号／00100-6-41512）にて管理本部 経理課へご送金いただければ、直接郵送いたします。●『聖徒の道』のお申し込み先…〒106東京都港区南麻布5-10-30管理本部経理課 ☎03-3440-2351（代表）●『聖徒の道』の配送についてのお問い合わせ…〒133東京都江戸川区西小岩5-8-6／末日聖徒イエス・キリスト教会 資材管理部配送センター ☎03-5688-3391

The Seito No Michi (ISSN 0385-7670) is published monthly by The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 50 East North Temple, Salt Lake City, Utah 84150, U.S.A. and Canadian subscription price is \$9.00 per year. SIXTY days' notice required for change of address. INCLUDE ADDRESS LABEL FROM A RECENT ISSUE. CHANGES CANNOT BE MAID UNLESS BOTH OLD ADDRESS AND NEW ONE ARE INCLUDED. Send U.S.A. and Canadian subscriptions and queries to Salt Lake Distribution Center, Church Magazines, P. O. Box 26368, Salt Lake City, UT 84126-0368, U.S.A. SUBSCRIPTION HELP LINE: 1-800-453-3860, U.S. EXT. 2947; CANADA EXT. 2031. CREDIT CARD ORDERS (VISA, MASTERCARD, AMERICAN EXPRESS) MAY BE TAKEN BY PHONE. PERIODICALS POSTAGE PAID AT SALT LAKE CITY, UTAH.

POSTMASTER:Send address changes to Salt Lake Distribution Center, Church Magazines, P.O.Box 26368, Salt Lake City, Utah 84126-0368, U.S.A.

天父のもとへ近づく

わたしは『リアホナ』（ポルトガル語版）にととても感謝しています。『リアホナ』の記事のおかげで、これまで何度も自分の問題を解決することができました。この機関誌を読むことは天父に近づくための一つの方法だと思えます。それは主の御霊が読む人の心に触れるからです。

ブラジル、サンパウロ、モギ・ダスクルスステーク、モギ中央ワード、ダヌーピア・ドーアテ

神の武器で身を固める

『リアホナ』（英語版）を読んでいると、古代の司令官モロナイの軍を思い出します。モロナイは戦いに勝つために神のあらゆる武器で軍隊を固めさせました（アルマ43：19参照）。わたしたちも、教会の機関誌や書籍を読むことで神の武器で自分たちの身を固めることができます。これらの一つ一つの記事を読みながら、霊的に成長し、人生でどんな状況に陥っても、それを乗り越えていく備えができるのです。

フィリピン、タバオ伝道部  
ジェームズ・マルセ・アロー長老

心からの尊敬と感謝を！

1995年11月号の『リアホナ』（スペイン語版）に掲載されたジェームズ・E・ファウスト副管長の大管長会メッセージを読み、手紙を書かずにはいられませんでした。ファウスト副管長の「主に仕え、悪魔に立ち向かう」というメッセージに強く引きつけられたのです。その内容は実に深遠で真の道徳を説いたメッセージでした。このメッセージによってすべての人の人生はより良いものとなるでしょう。大管長会

の方々へ心からの尊敬と感謝をお伝えします。

ペルー、ピウラ、カスティリアステーク、ミラフローレスワード  
ビクター・プラセンシア・ファロー

愛する友

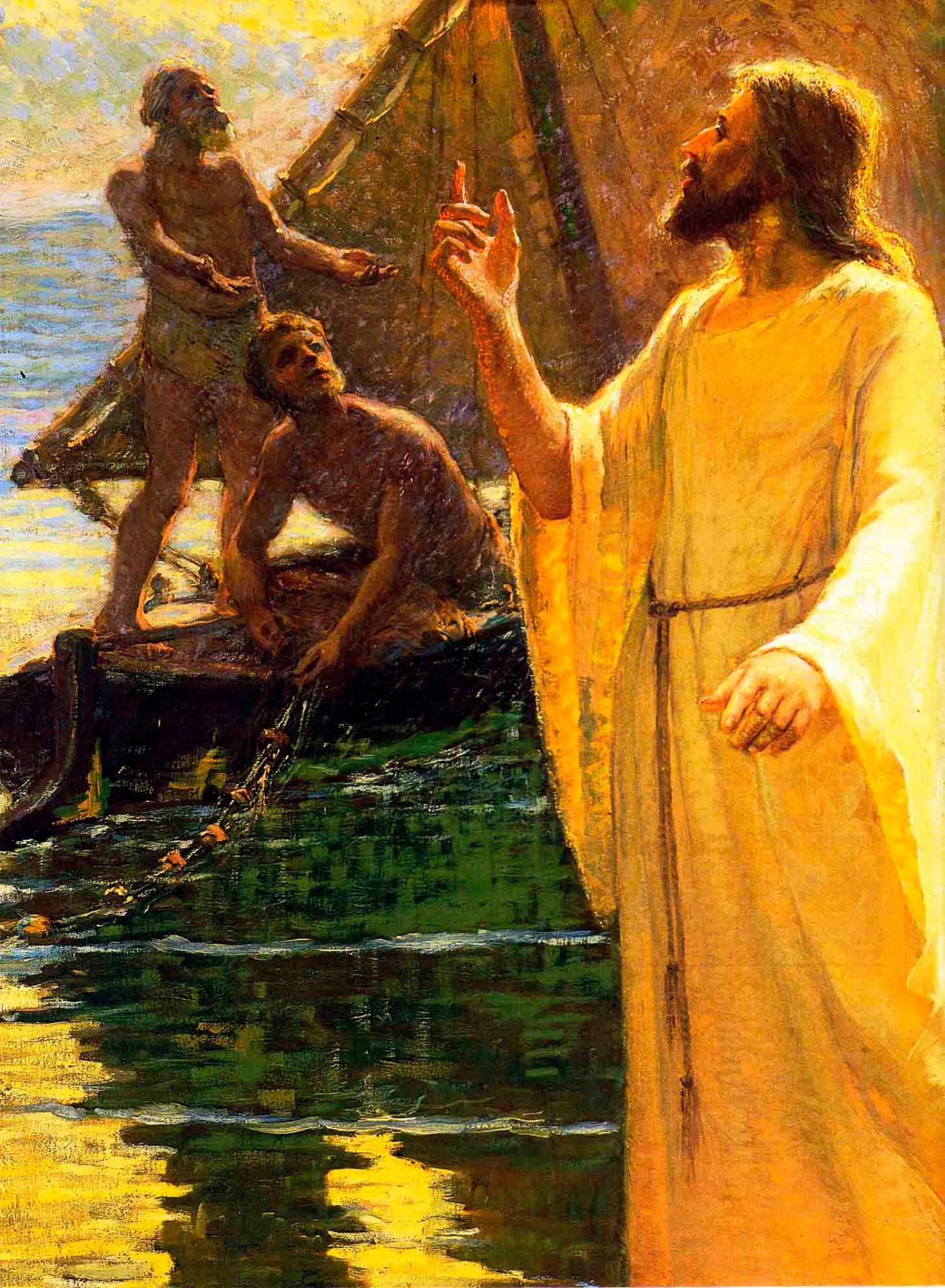
毎月わたしが何より待ち遠しい瞬間の一つは、愛する友である『リアホナ』（スペイン語版）が家に届くときです。わたしは毎月ページを開くのがとても楽しみです。そこには真理と平安、そして多くの愛にあふれたメッセージが載っているからです。読む度に救い主への愛が深まり、また主がどれほどわたしたちに心をかけてくださっているかに気づきます。すべての人が『リアホナ』から得られるこのすばらしい気持ちを感じ、幸福を享受できるよう願っています。この本はどのページを開いてもキリストの純粋な愛を感じられます。

ウルグアイ、モンテビデオ東伝道部、サリナス支部  
エストレラ・ルイズ・ディアス・デ・ガンベッタ

どこにあってもすばらしいもの

わたしは『リアホナ』はあらゆる点で卓越した読み物であると思います。その中にある写真やイラストも、物語同様にすばらしいものです。世界中の教会員が分かち合ってくれるすばらしい経験に心から感謝しています。何度も彼らの話のおかげで霊的に強められました。

ブラジル、クリティーバ、イクアクステーク、クリティーバ第4ワード  
エルソン・カルロス・フェレイラ



# 従順を通して 得られる力

第一副管長  
トーマス・S・モンソン

イエスはガリラヤでペテロに「わたしに従ってきなさい」と言われました。その同じイエスは同じ言葉を、わたしたちにも向けていらっしやいます。「わたしに従ってきなさい」と。

ある詩人は真理の探究のほんとうの意義を理解し、次のような不朽の詩を書いています。

真理は人も神も 願ひ求む宝

行きて求めよ 深きに、また高き空に光る

いと尊き希望

真理は時を超えて 始めなり、終わりなり

天は滅び、地は裂くとも 真理は悪を切り抜け

永遠に変わらずあらん

(『賛美歌』175番)

1833年5月、オハイオ州カートランドにおいて預言者ジョセフ・スミスを通して与えられた啓示の中で、主は次のように宣言されました。

「真理とは、現在あるとおりの、過去にあったとおりの、また未来にあるとおりの、



悪魔の最も強く心をそそる狡猾な誘惑を受けられたとき、主は自ら正しいと知ることから離れず、従順の模範をわたしたちに示されました。

物事についての知識である。……

真理の御霊は神から出ている。……主〔イエス〕は完全な真理，すなわちすべての真理を受けられた……。

人はだれも神の戒めを守らないかぎり，完全な真理を受けることはない。

神の戒めを守る者は真理と光を受け，ついに真理によって栄光を受けて，すべてのことを知ようになる。」（教義と聖約93：24，26-28）

すでに完全な福音が回復され，光が与えられているこの時代に生きているわたしたちは，「真理の泉」を求めんにしても，海図に描かれていない海や，道標のない道を旅する必要はありません。なぜなら，生ける天の御父が道を明らかにし，従順という絶対確実な地図を用意しておられるからです。

主の啓示による御言葉は，従順がもたらす祝福と，回り道して罪と過ちという禁じられた道を行く旅人が必ず味わわなければならない心痛や絶望について，いきいきと教えています。

サムエルは，動物の犠牲をささげる習慣に浸り切っていた当時の人々に向かって，大胆に次のように宣言しました。「従うことは犠牲にまさり，聞くことは雄羊の脂肪にまさる。」（サムエル上15：22）預言者たちは，その生きた時代が古代か現代かを問わず，従順がもたらす力を理解してきました。次のように語ったニーファイについて考

えてみてください。「わたしは行って、主が命じられたことを行います。」(1ニ一ファイ3:7) また、モーサヤの息子たちが持っていた力について、アルマは次のようにすばらしい言葉で説明しています。「さらに、彼らは正しい理解力を備えた人々であり、また神の言葉を知るために聖文を熱心に調べてきたので、すでに真理を深く知るようになっていた。

そればかりではない。彼らはしばしば祈り、また断食もしたので、預言の霊と啓示の霊を受けていた。そして、教えるときには、神の力と権能をもって教えた。」(アルマ17:2-3)

デビッド・O・マッケイ大管長は、1957年4月の総大会の席上、開会のメッセージの中で、教会員に向けて、非常に簡潔にしかも力強く次のように述べました。「神の戒めを守ってください。」そして彼の後継者たちも、その同じ従順を求めてきました。

救い主御自身もそのメッセージの中で、従順について強調し、次のように宣言していらっしゃいます。「わたしから祝福を受けたいと思う者は皆、その祝福のために定められた律法とその条件に従わなければならない。その律法とその条件は、創世の前から定められたものである。」(教義と聖約132:5)

だれも主のこの教えを批判することはできません。主のなされたことを見ると、まさしくこの教えのとおりです。主は、その完全な生涯を送り、御自身の神聖な使命を尊ぶことによって、神に対する純粋な愛を示されました。主には傲慢なところがまったくありません

んでした。うぬぼれて思い上がることもありませんでした。不忠実な点はありませんでした。非常に謙遜で、誠実かつ忠実な御方でした。

主は御霊によって荒野に導かれ、そこで偽りの頭である悪魔に誘惑されました。しかし、40日40夜の断食で肉体的に弱り、「空腹になられた」にもかかわらず、悪魔の最も強く心をそそのかす狡猾な誘惑を受けられたとき、主は自ら正しいと知ることから離れず、従順の模範をわたしたちに示されました。

ゲツセマネでの苦悶のときも、汗が血のしたたりのように地に落ちたという苦しみに耐え、次のように言って、従順な息子であることを模範をもって示されました。「父よ、みこころならば、どうぞ、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの思いではなく、みこころが成るようにしてください。」(ルカ22:42)

イエスはガリラヤでベテロに「わたしに従ってきなさい」と言われました。ピリポにも同様の指示を出されました。取税人のレビもちょうど人々から税を徴収していたとき、この招きの言葉を受けました。主は御自身を追いかけて来た金持ちにも、「わたしに従ってきなさい」と言われました。その同じイエスは同じ言葉を、わたしたちにも向けていらっしゃいます。「わたしに従ってきなさい」と。わたしたちは喜んで従おうとしているのでしょうか。

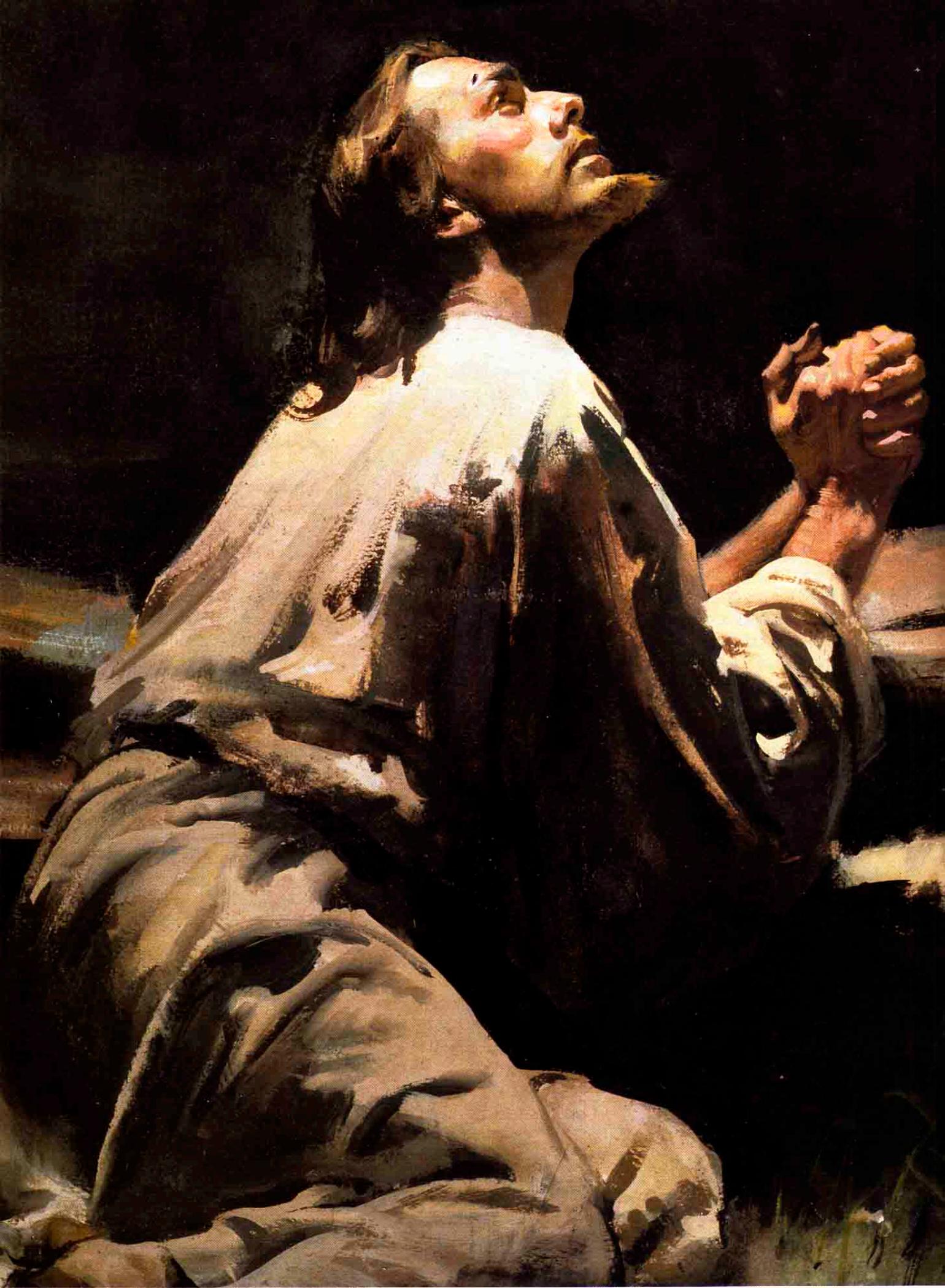
従順といえはまず預言者が思い浮かびますが、この力の源は、現代のわたしたちも身に付けられるということ

胆に銘じておく必要があります。

この従順の教訓をよく学んだ、ある優しく誠実な人物がいます。彼には財産があるわけではなく、つつましい暮らしをしていました。彼はヨーロッパで教会に入り、一生懸命に貯金し、犠牲を払って北アメリカへ移住しました。そこは右も左も分からず、言葉も通じない、生活習慣も異なる地でした。しかし、教会は、自分が信じ従ってきた、同じ主によって導かれる教会でした。やがて教会員に対して幾分敵対感情のある、人口数万人ほどの町で奮闘している小さな聖徒の群れを管理するため、支部長に召されました。少ない人数で、責任は山ほどありましたが、彼は教会のプログラムに従いました。彼は支部の会員たちに心からキリストに従う模範を示しました。そして会員たちもすばらしい愛をもってそれにこたえました。

彼は小売り商店を営んで生計を立てていました。

彼にはあまり金銭的な余裕はありませんでした。しかし、いつも什分の一として、収入の1割以上のものを納めていました。彼はその小さな支部で宣教師基金を始めました。しばらくの間は、その宣教師基金を献金するのは彼だけでした。その町に宣教師がいるときは、彼は父親のように彼らの面倒を見たり、食事の世話をしたりしました。自分の家を訪ねて来た宣教師たちには、その働きへの感謝の思いと、少しでも助けになればとの気持ちを込めて、必ず何かプレゼントをしました。遠くから来て彼の住む町に寄り、その



ゲツセマネでの苦悶のときも、救い主は 次のように言って、従順な息子であることを模範をもって示されました。「父よ、みこころならば、どうぞ、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの思いではなく、みこころが成るようにしてください。」

支部を訪ねた教会員たちは必ず親切なもてなしと心遣いを受けました。そして、彼がほんとうにすばらしい人物で、主に従順な僕だということを知りました。

彼は自分を管理する立場の人々に対しても、心からの敬意と並々ならぬ心配りを示しました。彼にとってその人たちは主の使いであり、その要請は主からの求めに等しいものだったので、彼は指導者たちが快適な状況の中で責任を果たせるように心を配り、特に祈りの言葉の中でもそのことへの気遣いを繰り返し示しました。ある安息日に彼の支部に来た管理役員たちは、様々な集会や会員への訪問の際に、彼と何度も祈りを一緒にささげました。その日の夜、彼らはとても爽快で、霊的にも高められた気持ちで、彼に別れを告げました。その後の4時間は冬空の下でのドライブでしたが、心はずっと楽しい気分でした。この出来事は、何年かたった今でも心温まる思い出になっています。

学識のある人、人生経験豊かな人たちが、この謙遜で無学な、神に仕える人に出会い、1時間でも一緒にいられ

たら幸せだと思えるほどでした。彼は取り立てて優れた容ぼうをしているわけでもなく、彼が話す英語はただたどしくて、理解するのも幾分難しいものでした。また、つましい家に住み、自動車もテレビも持っていませんでした。本を書いたことなどありませんでしたし、雄弁に説教することはありませんでした。世間の人々の気を引くようなこともまったくしませんでした。しかし、数多くの忠実な人々がひっきりなしに彼を訪ねて来ました。なぜでしょうか。それは、人々が彼のもつにある「真理の泉」から水を飲みたいと願ったからです。彼は言葉の人ではなく、行いの人でした。自分が話した説教よりも、実際の生活の中に見られる力で教える人だったのです。

この貧しい人は少なくとも収入の10分の2を、いつも喜んで主にささげていました。そのことは、什分の一のほんとうの意味について、わたしたちに明らかな理解を得させてくれます。彼は飢えた人々を助け、旅人を家に泊めていました。そうすることで、彼は主に対してしたいと思うことを、人々に対してしたのです。彼とともに祈り、主の執り成しへの彼の信仰を知るのには、祈りへの認識を新たにすることがなりました。

彼は第一の大切な戒め、そして、それと同様の第二の大切な戒めに従順だったと言えるのではないのでしょうか。彼はすべての人に対して心の中に慈愛を満ちし、絶えず徳で自分の思いを飾り、それによって、神の前において自信が増し加えられたのです（教義と聖

約121：45参照）。この人は優しさと義を輝かせていました。彼の力の源は、その従順さにありました。

今わたしたちは、この複雑で激しく移り変わる世界の様々な問題に対処するための力を熱心に求めています。わたしたちが、不屈の精神と固い決意を持ち、自分自身をしっかりと保つならば、ヨシユアが語ったように「わたしとわたしの家とは共に主に仕えます」と宣言するその力を得られることでしょうか（ヨシユア24：15）。□

#### ホームティーチャーへの提案

1. 回復されたイエス・キリストの福音を知った人々は、福音の「真理の泉」を探して当てるの必要はない。天の御父がすでに進むべき道を示し、従順という絶対確実な地図を与えてくださっているからである。

2. 主の啓示の言葉は、従順がもたらす数々の祝福と、罪や過ちの必然的な結果である心痛や絶望を明らかにしている。

3. イエスはゲツセマネでわたしたちに従順の模範を示された。「わたしの思いではなく、みこころが成るようにしてください。」（ルカ22：42）

4. 主イエスは、今のわたしたちにも「わたしに従ってきなさい」と声をかけておられる。わたしたちは喜んで従おうとしているだろうか。

# 「その本は 捨てないで！」

アパレシダ・ヒメネス・デ・オリベイラ・パソス

**様**々な方法や場所で探し求めていた幸福が、時にはまったく思いがけない所で見つかるということがあります。わたしの場合がそうでした。手の届く所に幸福があったのに、わたしは何年もそれに気づかずにいたのです。

わたしがバプテスマを受けて末日聖徒イエス・キリスト教会の会員になったのは、1981年、24歳のときでした。主人も一緒にバプテスマを受けました。娘のジュリアナは2歳でした。所属していたブラジルのトゥクルビ支部はとても小さく、集会はアブニダ・ノバ・カンタレイラにある家で開かれていました。どういうわけか集会に出席し始めて1年もたたないうちに、わたしたちは教会を離れてしまいました。

1983年にグアルイヨスに引っ越すころには、教会に戻る気持ちはまったくなくなり、教会員たちとも完全に音信不通の状態でした。当時は、わたしたちにとってとても苦しい時期でした。ある日、家の掃除中に、わたしと主人は長年しまっておいた教会の本を全部ごみ箱に捨てることにしました。中には『モルモン書』が1冊ありました。

『モルモン書』が手もとにある間、わたしは一度も中を開けたことがありませんでした。価値のない本だと考えていたからです。しかし、ごみ箱に捨てようとする時、4歳になっていたジュリアナが表紙に描かれた天使モロナイの絵を見て言いました。「ママ、だめ！ その本は捨てないで！」それでも捨てようとしたのですが、わたしは主人と互いの顔を見合わせました。結局、娘の願い

を聞き入れました。

こうして、『モルモン書』は我が家に残りました。

1987年、わたしは3番目の子を出産したのですが、その後、健康面で難しい問題を幾つか抱えました。そして、自分がなぜ不幸なのか知りたいと思い、真理を探し求め始めたのです。しかし、とても気落ちしたわたしは、自分に救いはないと信じ始めていました。

1989年のある日、主はわたしに『モルモン書』を手取るように促してくださいました。いったん読み始めると、なかなかやめられないことに気づきました。早く続きが読めるよう、毎日夜が明けるのを心待ちにしていました。自分の中で御霊をととても強く感じ、涙が出ました。そして、かつて歩んだ主の道から離れたため、どれほど多くのものを自分が失っていたか、ようやく気づいたのです。

わたしは教会がどこにあるか探そうと決心しました。電話帳で教会の名前を見つけ、連絡を取りました。わたしたちは再び教会の集会に集い始め、以来ずっと活発に集っています。わたしと主人は神殿に参入し、家族は永遠に結び固められました。

わたしは『モルモン書』が真実であり、『モルモン書』を絶えず勉強するなら、どんな試練にも打ち勝つ力が与えられることを知っています。祝福と試練と、そして娘を促してわたしたちが『モルモン書』を捨てるのを思いとどまらせてくださった天父に、感謝しています。もしあのとき『モルモン書』を捨てていたら、『モルモン書』とともに自分の幸せも捨てていたでしょう。□



# 「見よ、わたしは イエス・キリストである」

アメリカ大陸のニーファイ人を訪れられた  
主イエス・キリストの絵物語

**紀** 元前約559年から545年ごろ、預言者ニーファイは主イエス・キリストが将来、ニーファイ人とレーマン人を教え導かれることについて書き記し、このように預言しました。「キリストは死者の中からよみがえった後、あなたがた、すなわちわたしの子

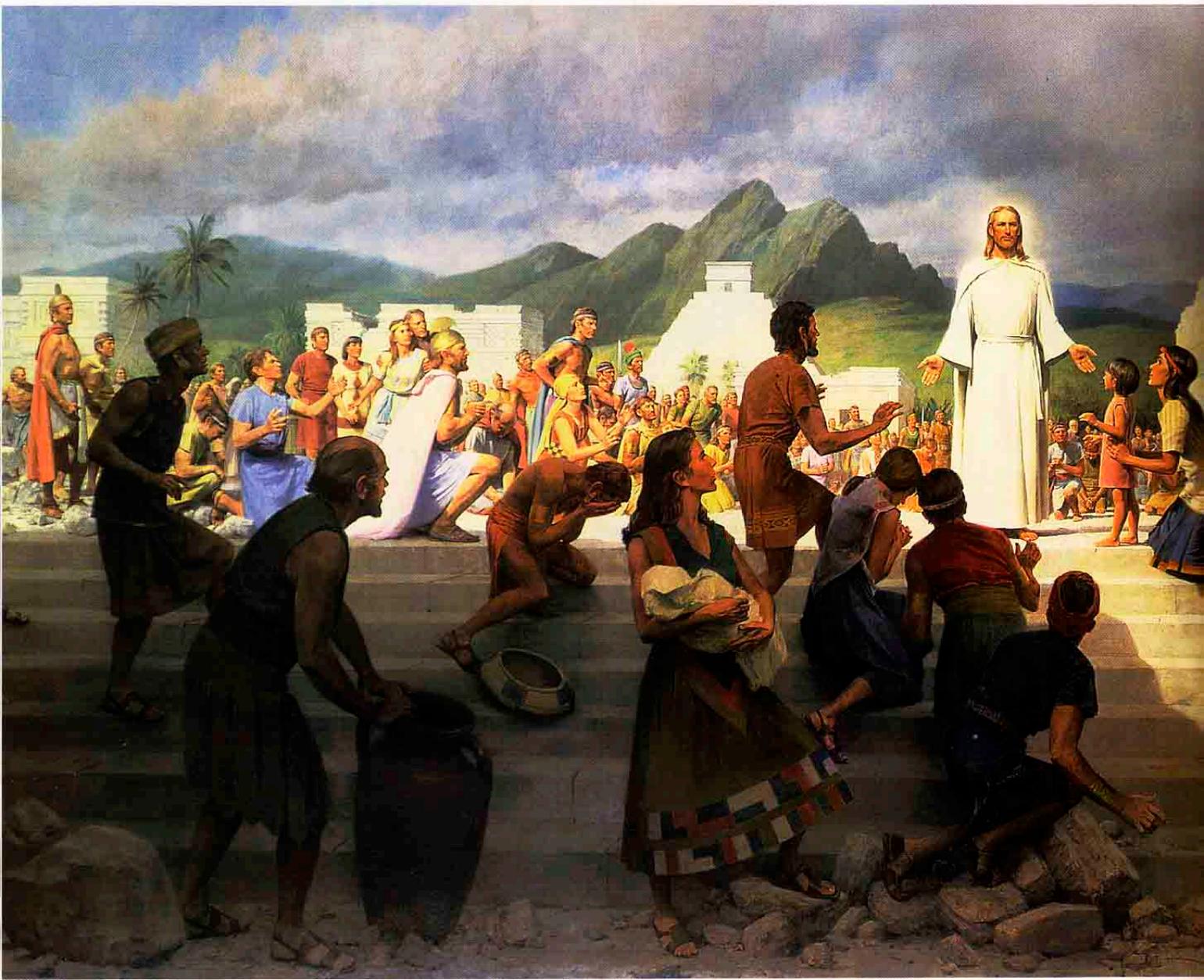
孫と愛する同胞<sup>ほらかう</sup>に御自身を現される。そして、そのときにキリストがあなたがたに語られる御言葉<sup>みことば</sup>は、あなたがたが守らなければならない律法となる。……

メシヤが来られると、わたしの民にメシヤの降誕のしるしが数々与えられ

る。また、死と復活のしるしも数々与えられる。……

義の御子は将来彼らに現れ、彼らを癒<sup>いよ</sup>される。そして、……彼らは御子によって平安を保つ。」(2ニーファイ 26:1, 3, 9)

600年近くの間、義にかなったニー



ファイ人とレーマン人はキリストの訪れを待ちました。そしてキリストの降誕のしるしから34年後、キリストの死のしるしがありました。大きな嵐、地震や天変地異が起り、3日間、地は厚い真っ黒な闇に覆われました。後になって、バウンティフルの地に立つ神殿に民が集まったとき、「彼らは……すでにその死にかかわるしるしが現れたイエス・キリストについても語り合っていた。……見よ、天から一人の男の方が降って来られるのが見えた。この御方は白い衣を着ておられ、降って

来て群衆の中に立たれた。全群衆の目がこの御方に注がれた……。

そこでこの御方は、片手を差し伸べて人々に言われた。

『見よ、わたしはイエス・キリストであり、世に来ると預言者たちが証した者である。』(3ニーファイ11:2, 8-10)

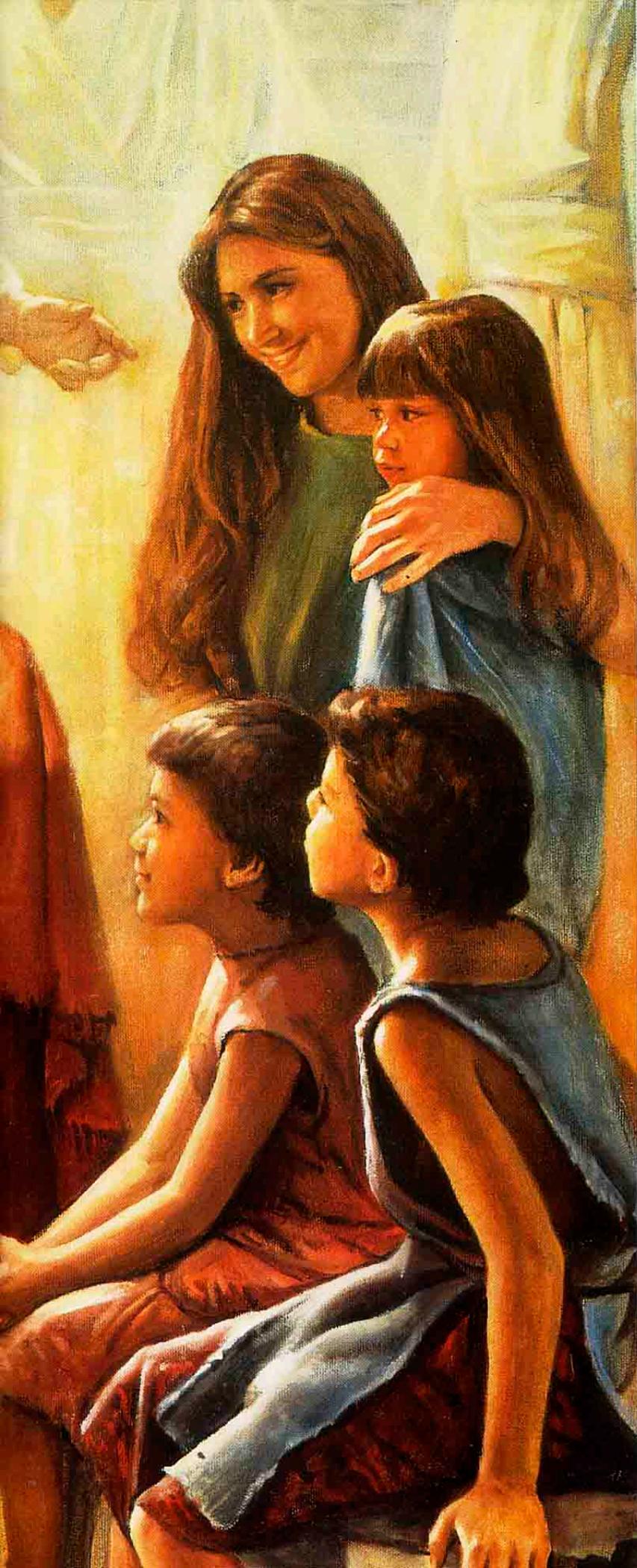
このようにして、復活された主イエス・キリストは西半球の民に奉仕の業を始められました。以下の美術作品は、第三ニーファイ第11章から第28章に記された出来事の幾つかを描写していま

す。——キャスリン・L・ポールター

「アメリカ大陸を訪られたイエス・キリスト」ジョン・スコット作。「天から一人の男の方が降って来られるのが見えた。この御方は……降って来て群衆の中に立たれた。全群衆の目がこの御方に注がれた。」(3ニーファイ11:8)





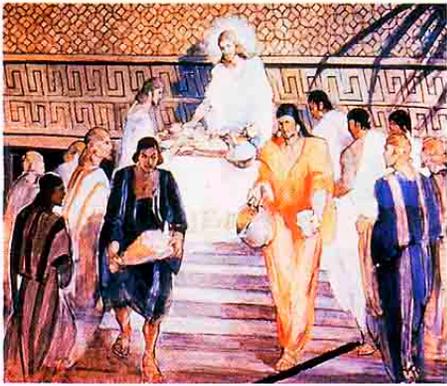


上——「ニーファイ人とともに祈られるキリスト」テッド・ヘンギー作。

「彼らは次のように証した。『わたしたちはイエスが御父に話されるのを見聞きしたが、それは目がまだ見たこともなく、耳がまだ聞いたこともないほど、大いなる驚くべきことであった。……それはどんな舌も語ることができず、どんな人も書き記すことができず、人々の心が想像できないほど、大いなる驚くべきことであった。またわたしたちは、イエスがわたしたちのために御父に祈ってくださるのを聞いたが、そのときにわたしたちの心に満ちた喜びは、だれも想像することができない。』」（3ニーファイ17：16-17）

左——「キリストと『モルモン書』の子供たち」デル・パーソン作。

「また、イエスは幼い子供たちを一人一人抱いて祝福し、彼らのために御父に祈られた。……また、イエスは群衆に語って、『あなたがたの幼い子供たちを見なさい』と言われた。そこで彼らは、……天使がまるで火の中ありさまにいるかのような有様で天から降くだって来るのを見た。天使は降って来ると、幼い子供たちを取り囲み、……そして、天使は幼い子供たちに恵みを施した。」（3ニーファイ17：21，23-24）



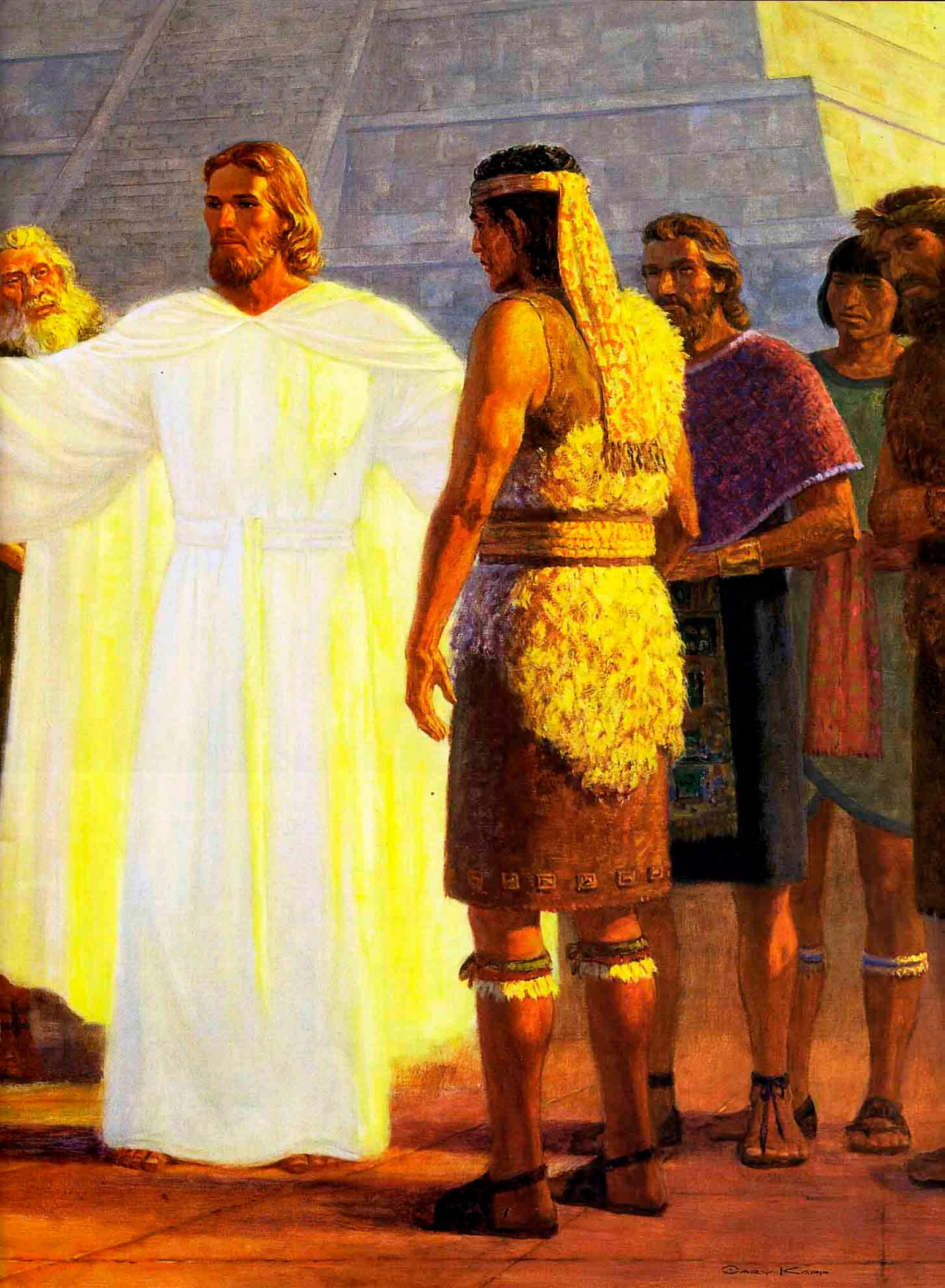
上——「新世界での聖餐」ミネルバ・タイカート作。

「そして、弟子たちがパンとぶどう酒を持って来ると、イエスはパンを取り、それを裂いて祝福された。それからイエスは、弟子たちに与えて、食べるように命じられた。彼らが食べて満たされると、イエスは群衆にも与えるように命じられた。」(3ニーファイ18：3-4)

右——「イエス・キリストとニーファイ人の弟子たち」ゲーリー・カップ作。

「したがって、あなたがたはさらに幸いである。あなたがたは決して死を味わうことがない。わたしが天の力をもってわたしの栄光のうちに来るときまで、すなわち父の御心のとおりにすべてのことが成就するそのときまで、あなたがたは生き長らえて、父が人の子らのために行われるすべてのことを見るであろう。」(3ニーファイ28：7)





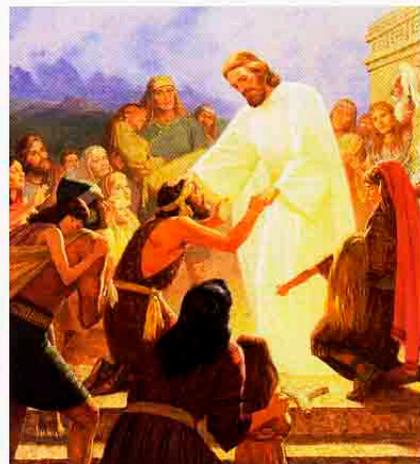


上——「記録を世に現す」ロバート・T・バレット作。

「そして、イエスはニーファイに、『あなたがたが書き継いできた記録を持って来なさい』と言われた。……さて、弟子たちが書き記してきたすべての聖文をまとめて説き明かした後、イエスは、御自分が説き明かした事柄を教えるように、彼らに命じられた。」(3ニーファイ23：7，14)

右——「主は皆をことごとく癒された」ゲーリー・カップ作。

「さて、……群衆はこぞって、病気の者、苦しんでいる者、足の不自由な者、目の見えない者、口の利けない者、そのほかどんなことでも苦しんでいる者たちを伴って前に進み出た。するとイエスは、御自分のところに連れて来られた者をことごとく癒された。」(3ニーファイ17：9) □





## たった一人の生徒

ベアトリス・エステル・ペレツ・コルテス

1974年、まだ17歳だったときに、わたしはチリ・サンティアゴのマイブ支部のセミナー教師に召されました。当初は16人の生徒がいました。

そのころのマイブ支部に該当する地域はとても広がったため、セミナーに出席するのに遠くから通って来なければならない生徒も何人かいました。わたし自身も25ブロックもの長い道のりを歩いて、古くて暖房設備もない教室へと通っていました。でもセミナー教師という召しにととてもわくわくしていたので、その古い建物が、この世でいちばん美しい場所のように思えたものです。わたしたちは教会歴史のコースに取り組み始めました。生徒たちは非常に意欲的にレッスンに参加しており、これといった問題もなく、すべてがとてもうまくいっているように思えました。

秋になり寒さが増すにつれて、クラスには空席が目立つようになりました。そこで生徒を励まし、出席を促すための計画を練りました。それはしばらくの間功を奏したものの、冬の訪れ

とともに本格的な寒さに見舞われると、セミナーへの出席はますます困難になってきました。継続して出席する生徒の数は減る一方でした。

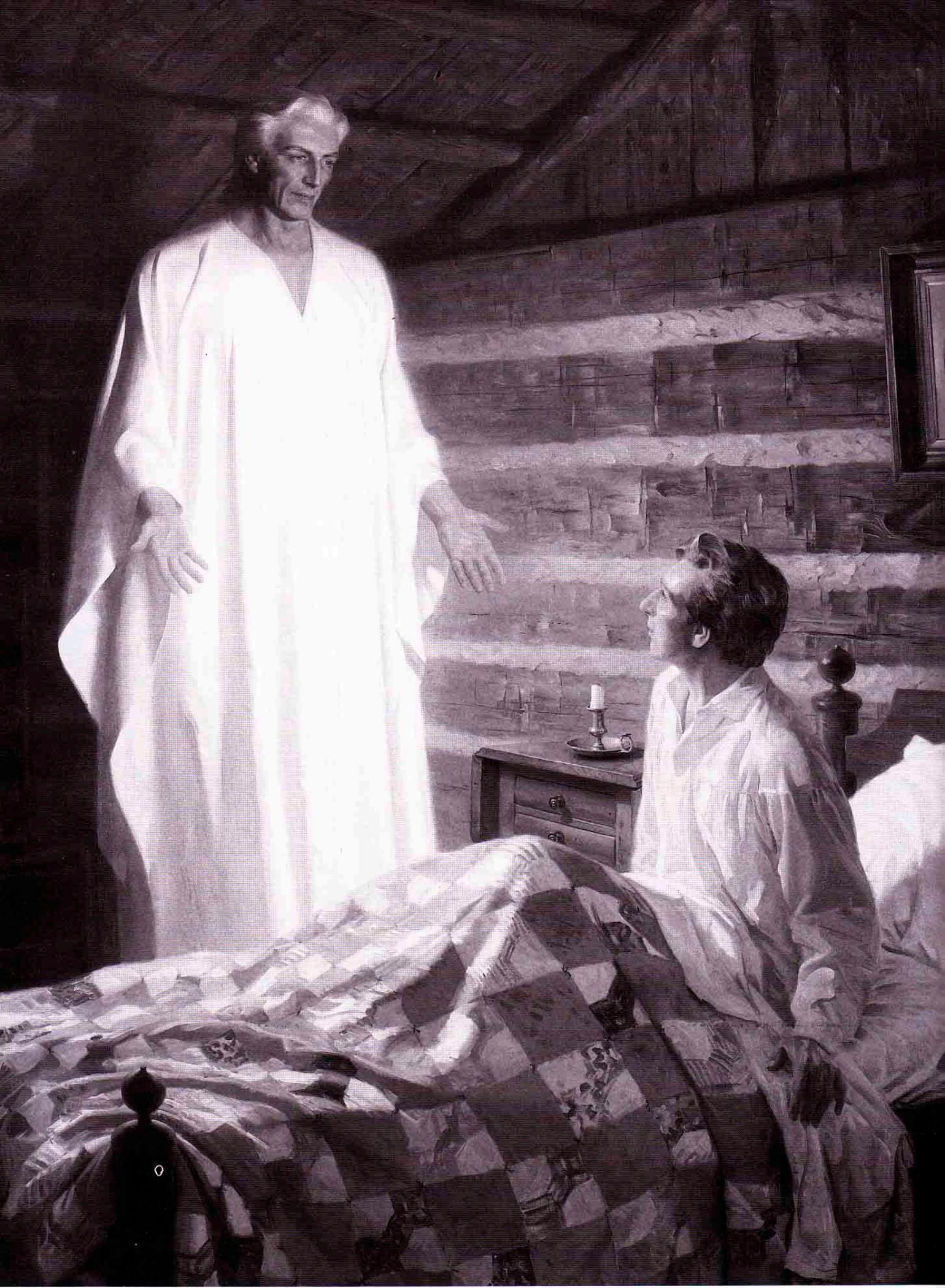
しばらくすると、非常に残念なことに出席者はわずか3人になってしまいました。わたしには教師としての経験はありませんでしたが、信仰と証を込め、熱心に全力を尽くして、一つ一つのレッスンを準備し続けました。毎日セミナーへ向かうときも、心の中で祈り続け天父を身近に感じる事ができました。教室に着くころには御霊に満たされ、たくさんの生徒がそこに集まったときのような幸せな気持ちになりました。

でも、時にはすっかり自信を失い、セミナー教師を続けるべきかどうか迷ったこともありました。地区の集会で各支部ごとにセミナー生徒の出席が取られたときもそうでした。マイブ支部の名が呼ばれたとき、返事したのは、一人の生徒とわたしだけだったのです。皆笑っていました。頬を平手でたたかれたようなショックを受け、

指導者に頼んでセミナーを中止させてもらおうかと思ったほどでした。しかしそのとき、御霊による平安がわたしに注がれ、セミナーを続けるようにという促しを感じたのです。こうしてわたしは、最後まで頑張ろうと決心しました。

セミナーの卒業式の日が訪れました。マイブ支部からは3人の生徒が達成証書を受けることになっていましたが、式に出席し、自分の手で証書を受け取ったのは3人のうち、ペドロ・バイヨンという生徒だけでした。でも生徒の数は問題ではありませんでした。自分に与えられた役割には、非常に深い意図があることをすでに理解していたからです。セミナーにかかわったこの1年が、わたしやペドロにとって、どれほど有意義であったか実感していたのです。

わたしはたった一人の生徒であったペドロ・バイヨンのことを決して忘れません。そして人生において霊的に最も充実していたあのころのことを決して忘れないでしょう。□





# エリヤの霊

大管長  
ゴードン・G・ヒンクレー

**18** 23年9月21日の夜、天使モロナイが初めて少年ジョセフ・スミスを訪れました。わたしにとって実に意味深いのは、進展著しい教会の家族歴史の業の先触れともいべき出来事が、神権時代のこの幕開けに起きたことです。ジョセフの嘆願に答えて、ジョセフの寝室に光が満ち、やがて「真昼の時よりも明るく」なって（ジョセフ・スミス—歴史1：30）、空中に立つ一人の人物がジョセフの前に現れました。

この人物は17歳の青年に向かい、その名を呼んで、「自分は神の前から遣わされた使者であること、その名はモロナイであること、神が〔ジョセフ〕のなすべき業を備えておられること、また〔ジョセフ〕の名が良くも悪くもすべての国民、部族、国語の民の中で覚えられること」などを告げました（33節）。

さらにこのモロナイは、『モルモン書』の記録についても触れ、それについて詳細に語った後で、マラキ書の言葉を、特にマラキ書の最後の数節を、現在の『欽定訳聖書』とは多少異なった言い回しで引用しました。

それは、次のような言葉です。「見よ、主の大いなる恐るべき日が来る前に、わたしは預言者エリヤの手によってあなたがたに神権を現そう。……

彼は先祖に与えられた約束を子孫の心に植え、子孫の心はその先祖に向かうであろう。そうでなければ、主の来臨の時に、全地はことごとく荒廃するであろう。」（38-39節）

わたしの兄弟姉妹の皆さん、繰り返して申し上げます。わたしにとって、何よりも意味深いと思われるのは、この天使の言葉、すなわち死者の御業に関するマラキの驚くべき預言を繰り返したこの宣言が、あの丘から金版を取り出すことを許される4年も前に少年ジョセフに伝えられたという点です。ジョセフにはアロン神権もメルキゼデク神権も授けられておらず、彼自身バプテスマも受

けておらず、さらに教会も組織される以前の出来事でした。

そのことから、主の計画の中で、この業がどれほどの位置を占めるのか、はっきりと分かります。

エリヤがこの業の鍵<sup>かぎ</sup>を携えて現れたのが1836年ですから、宣言があった後の何年かは、この業に関して見るべき進展はありませんでした。しかし、この業の重要性について、全能の神の知恵を疑える人がいるでしょうか。神はその無限の知恵により、あらゆる時代に生まれた神の息子娘たちが、神の愛する御子のなされた贖い<sup>あがな</sup>によって一人残らず完全な恩恵を受けられるように、ご計画を立てられました。そしてこの業が進められなければ、主が言われるように、地球を創造し、統治するという計画全体が破綻<sup>はたん</sup>を来し、計画が水泡に帰してしまいます（ジョセフ・スミス—歴史1：39参照）。

現在、世界中には数多くの系図協会や家族歴史協会が存在しています。わたしの考えでは、こうした組織の出現も皆、エリヤの訪れの結果もたらされたものです。世界で最も古く、また最も権威ある協会の一つに、「ニュー・イングランド歴史系図協会」がありますが、これは1844年、すなわち預言者ジョセフ・スミスが亡くなった年に組織されたものです。以来、特にここ数年来、家族の歴史への関心は急激に高まってきました。その高まりを受けて、様々な要請に応じられるよう、当教会の家族歴史部も拡大を続けています。

1894年に「ユタ系図協会」が組織されたとき、組織に当たった人々は11冊の系図資料を寄贈しました。この11冊を出発点として、現在では蔵書も25万8,000冊を数えるまでに成長しました。さらに、現在でも毎月1,000冊ずつ、蔵書数が増加しています。

この蔵書に加えて、現在190万巻のマイクロフィルムが保管されており、その数も毎月5,000巻ずつ増えてい

ます。そのため、家族歴史の資料に関しては世界最大の組織となりました。

今世紀の初頭には、ほんの一握りの教会員だけが、教会で保管されているわずかな数の家族歴史の資料を活用しているにすぎませんでした。しかし、時代は大きく変化しました。過去5年間の統計では、毎年75万人以上の人々が、ここソルトレーク・シティーにある図書館本館をはじめ、世界各地に散在している2,650以上もの家族歴史センターを利用して、家族の歴史を探求しています。家族歴史図書館を利用している人々のおよそ4割と、各地のセンターを利用している人々の6割が、教会員ではない人々です。信仰を共にしない人々に対しても、わたしたちは多大な奉仕をしているわけです。

この地球上に、この家族の歴史の業に比肩し得るほど大切な業はありません。わたしは、主がそのように定められたのではないかと感じています。この教会は主の教会であり、主の御名を頂いています。そして教会が存在する理由の一つは、死の幕のかなたに去って行った人々にも、永遠の命に至る完全な祝福を提供することにあります。

世界中には家族の歴史の記録のために働いている人々が数百万といます。なぜでしょうか。なぜそれほどまでして働くのでしょうか。わたしはそうした人々がこの業

の霊、すなわち、わたしたちの言う「エリヤの霊」によって心を動かされたためであろうと信じています。この業は子の心を父に向けさせる業なのです。しかし家族の歴史の探求に携わる大部分の人々は、この業の真の目的を理解しているわけではありません。恐らくは、強い好奇心にただ動かされて携わっているにすぎないでしょう。

これだけの時間と資金を投入する大事業ですから、目的がなければなりません。その目的とは、わたしたちが厳肅に証<sup>わか</sup>するとおり、幾世代にもわたる死者の名前を明らかにし、その人々も永遠の祝福と進歩にあずかれるよう、身代わりの儀式を行うことにあります。

この死者の名前を明らかにするという作業の成果がほんとうの意味で明らかになる場所は、主の宮をおいてほかにありません。その宮こそ、末日聖徒イエス・キリスト教会の神殿です。そして家族の歴史の探求の業が進められ、拡大していくにつれ、神殿の数も飛躍的に増えていくことになります。この12年間を見ても、それ以前の教会歴史上、建設し、奉獻した神殿の数と比較して、今ほど多くの神殿が建築され、奉獻されている時期はほかにありません。現在は、神殿建築と神殿活動にとって、未曾有の時です。ここ数年を見ても、数多くの美しい神殿が奉獻されてきました。現在でも、12か所以上で神殿

教会の家族歴史図書館は、家族歴史の資料に関しては世界最大の図書館となった。



PHOTOGRAPH BY JED CLARK



が建築中ないしは計画中です。

わたしは、わたしたちがふさわしくなりさえすれば、こうした神聖な建築物を建て続けることを主が許し、そのように導いてくださると確信しています。そのふさわしさを証明するための重要な指標があるとすれば、それは家族の歴史記録を探求し、それを神殿の中で行われる主たる事業の礎にできるかどうかです。

主の業は救いの業です。だれのためでしょうか。永遠の御父の恵みにより、恵みを受ける側は何ら努力をする必要もなく、神の御子の贖いの犠牲を通じて、あらゆる人々が死からよみがえられるようになりました。そのうえに、神聖な贖いの犠牲と主の限りない恵みと愛とにより、永遠の命にあずかるための機会、個人の働きまたは身代わりの働きを条件に、あらゆる人々にその扉が開かれることになったのです。

主の宮で行われる儀式に携わることにより、また、そのために家族の歴史記録の探求にあらかじめ携わることにより、わたしの知るかぎり、人はほかのいかなる活動にも増して主の犠牲の精神に近づくことができます。なぜでしょうか。それは、この業が時間と金銭とを惜しむことなくささげる人々によって遂行されているからです。彼らは、自分の力ではできない人々のために、何ら感謝も報いも求めることなく、その身代わりとして働い

ているのです。

わたしたちの使命は何と偉大であり、わたしたちの責任は何と大きいことでしょうか。1907年に世界の人々に向けて出された宣言の中で、大管長会はその使命について、次のように雄弁に書き表しています。以下はその言葉です。

「わたしたちの動機は利己的なものではなく、その目的は規模の小さな、この地上に限定されるものでもありません。わたしたちは全人類、すなわち過去に生を受けた人々、現在生を受けている人々、将来生を受ける人々が不滅の存在であると考えています。その人々の救いのために働くことこそ、わたしたちの使命です。そして永遠の時のように広大で、神の愛のように深いこの御業のために、今もこれから先も永遠に、わたしたちは自分をささげています。」(Messages of the First Presidency of The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints 『末日聖徒イエス・キリスト教会大管長会メッセージ』 ジェームス・R・クラーク編、4:155) □

(これは1994年11月13日、ハワード・W・ハンター大管長をしのび、現在の家族歴史部の先駆けとなったユタ系図協会の設立100周年を記念する衛星放送による説教を、一部編集し直して、掲載したものである。)



PHOTOGRAPH OF JORDAN RIVER TEMPLE BY GLEN HADLEY

HAWAII TEMPLE BAPTISMAL FONT. COPYRIGHT BY THE CORPORATION OF THE PRESIDENT, THE CHURCH OF JESUS CHRIST OF LATTER-DAY SAINTS; NO REPRODUCTION AUTHORIZED OR PERMITTED.



主の宮で行われる儀式に携わることにより、わたしの知るかぎり、人はほかのいかなる活動にも増して主の犠牲の精神に近づくことができます。

く み わ ざ

# 奇しき御業

マルセリーノ・フェルナンデス・レボヨス・スアレス

1973年にわたしが教会に入ったとき、死者の贖い<sup>あがな</sup>に関する教義に深い感銘を覚えました。新会員のころ、わたしは福音を知らずにこの世を去った先祖のために、身代わりの業を行おうと決心しました。

当時、わたしは生まれ故郷の小さな町アストゥリアスから500キロほど離れた、スペインのマドリッドに住んでいました。アストゥリアスには、先祖の記録がかなりあると思われました。わたしは、この記録を探し求めて、休暇や週末を何度も利用し、何百キロも旅して回りました。時には読み取るのも困難な古文書に囲まれながら、滞在中ずっとカトリック教会の教区事務所に行ったこともあります。

このような不便も、先祖に対して感じる愛に助けられて克服できました。ほこりを払い、破れた本とページを繕い、手に入った数多くの書物の解読を学びました。公的な記録、家族の記録、遺言、新聞、写真などはもちろん、このような教区記録簿にも助けられ、わたしは先祖の生涯にまつわる話や歴史を収集し始めました。先祖のことがある程度まで分かるようになると、彼らの幸福を喜び、悲哀とともに悲しむようになりました。

しかし、もう何もできそうにないように思える時が来ました。焼失した記録があまりにも多すぎたのです。スペインの歴史において、アストゥリアスは最も多く戦場となった場所の一つです。その戦禍を被り、多くの記録が犠牲になりました。家族からの情報を頼りに探し続けようと努めましたが、ほとんど成功しません。

家族歴史をいともたやすく探求できる人たちを考えると、肩を落とすこともありました。探し求めていた情報を得た人たちの奇跡的な記事を『リアホナ』（スペイン語版の国際機関誌）から読み、どうして自分にはこのような奇跡が起こらないのだろうと思いました。わたしの求めている情報はどこかにあるはずでした。

1994年のこと、わたしは休暇を取ってある地域に足を

運び、もう一度その一帯の教区を訪問することにしました。いつもながら、探求が終わっても、何も情報が得られません。ほんとうに意気消沈しました。それまで20年もの間、休暇を利用して調査し、何千キロもの道のりを旅し、山のような数の本を調べ、何百人もの人々と話し、かなりの出費もしてきました。それなのに何の結果も得られません。

妻とわたしはマドリッドへ帰るためにスーツケースに荷物を詰め込んでいました。そんな最後の瞬間になって、わたしはもう一度試みようとして決心し、以前に何度も訪問した教会に再び行ってみることにしました。

しかし今回は、ある記録を調べているときに、まさに探し求めていた名前と日付が突然自分の目の前に現れたのです。足の力が抜け、喜びのあまり叫び声を上げました。目に涙があふれ、辺りが見えなくなってしまいました。

以前何度試みても情報が得られなかったのは、名前が間違っていて登録されていたためでした。過去に調べた記録の中から、一度情報<sup>ひとたび</sup>がつかめると、存在すら知らなかった記録、すなわち戦禍を免れて残っていた別の記録までも明らかになりました。今では、それら先祖の神殿の業を終えることができました。

大いなる祝福を感じながら、マドリッドへ帰りました。ニーファイのように、天父がわたしたちを愛しておられること、主が命じられることにはそれを成し遂げられるように道が備えられていることを、わたしも知っています。□





レボヨス兄弟（右）は先祖のために  
スイス神殿に（上）参入したいと強く  
望み、20年間かけて様々な場所を  
訪れて、家族の記録を探求しました。  
その中にはスペイン・バルセロナの  
教会（左ページ下）もあります。



# 必要なのは悔い改めでした

クリストファー・チェトウィンド

ILLUSTRATED BY BRYAN LEE SHAW

求めていた確信を得る前に、  
まず、赦しを求めする必要があります。

ミッシェルと親しくなり始めたころ、彼女について知っていることと言えば、価値観がほかの友達よりずっとしっかりしているという点だけでした。ミッシェルがモルモンであるを知ったのは、彼女の家の家庭の夕べに招待されたときでした。

この家庭の夕べで、わたしはすばらしい二人の宣教師から福音を紹介されました。レッスンを受けたいかどうか宣教師から尋ねられたとき、あまり感じたことのない、しかし心地のよい気持ちを感じ、「はい」と答えました。

レッスンを受け、不安の多くが解決した後、バプテスマを受ける日を決めました。決心したことについてはよい気持ちを感じていましたが、正しいことをしているという何らかの確信を得たいと思いました。「この教会は真実だろうか」という問いに対する答えを見いだそうと、わたしは躍起になりました。朝、昼、晩と祈りましたが、答えを受けたという気持ちにはなりません。

そんなとき、わたしはデビー・ウィルデンという教会

員に会いました。一緒に話をしたり本を読んだりして何時間も過ごした後、わたしたちは祈ることにしました。二人でひざまずき、最初にデビーが、わたしを助けてくださるよう天父に祈りました。そしてわたしの番です。

祈り始めたちょうどそのとき、声が聞こえました。「赦しを求めなさい。ただ赦しを願うのです。」そう、声は語りかけました。

わたしは、自分の罪が赦されるよう心から天父に祈りました。温かい、ぞくぞくする気持ちが腕を通り、体の中心まで染み渡るのを感じました。5日後、わたしはバプテスマを受けました。

その後、福音に対する証はますます強くなり、バプテスマを受けてちょうど1年と2日後、わたしはオーストラリアのパースに伝道に召され、ニュージーランドの宣教師訓練センターに入りました。わたしは今、自分の証を人々に分かち合っ、わたしに福音を教えてくれた人と同じ喜びを味わっています。□



## キリストの力によって、何事でもすることができる

「あなたの心に平安があるように。」  
(教義と聖約121:7)

**わ**たしたちは皆、いろいろな試練に遭います。経済的な義務を果たす苦勞、永遠の伴侶を見つける苦勞、結婚生活を堅固なものとし、信仰深い子供を育てる苦勞、離婚や伴侶の死による予期せぬ孤独な境遇などです。事実、この世の経験の一部は、試練を受けることなのです(2ニーファイ2:11-12参照)。

しかし、わたしたちは独りで苦境に直面する必要はありません。ゴードン・B・ヒンクレー大管長は、「天の神が御力をもって万事をよしとされ、神の子供たちの生活に神の永遠の目的を成就されるという素直な信仰、疑う余地のない確信」をぜひとも身に付けるように、と勧めています(Ensign『エンサイン』1984年7月号, p.6)。

### 平安という主の賜物を 受けることができる

「キリストの力によって、何事でもすることができる」と信じるなら、わたしたちの重荷は軽くなります(ピリピ4:13参照)。

南アフリカ出身のメルビル・メイヤー一姉妹は、彼女の母親が93歳で亡くなったとき、この大きな賜物を受けました。一人娘であったメルビルは母親の死を深く悲しみました。母親の死は、高齢であることの苦痛や制約から母親を解放してくれた祝福であると感じましたが、母親がそばにいなくなったことを寂しく思いました。

ある土曜日の朝、メルビルは春の植え付けに備えて菜園の手入れをしなが

ら、次の日曜日の扶助協会のレッスンについて考えていました。レッスンは福千年の間に地球が受ける楽園の栄光についてでした。そのレッスンについて、また、母親を含むすべての人が復活するという約束についてよく祈ってきたものの、母親の体が暗い地中深く埋められているという考えを払いのけられずに、彼女の心は重く沈んでいました。母親にもう二度と会えないのではないかと恐れたのです。

しかし、作業を続けていると、御霊の力を感じました。「レッスンについて深く考えました。すると、わたしがそのとき作業をしていた大地は、母の肉体が埋められているのと同じ大地であるという考えが浮かびました。肥えた茶色の土の中に両手を入れると、あらゆる生命の再生、つまり復活について個人的な確信を受けました。こうして、わたしは平安を感じたのです。」

主はわたしたちを試練の中にあつて  
強めてくださる

主の助けを求め、御霊の力に対して思いと心を開くなら、主はわたしたちを試練の中にあつて強めてくださいます。それを行う最も確かな方法の一つは、人々に親切の手を差し伸べることです。奉仕の行いはわたしたちの心を和らげ、御霊の導きに思いを向けさせてくれます。また、聖餐にあずかることにより聖約を新たにし、御霊を受けることができます。祝福師の祝福や神権の祝福を通じて永遠の見地や洞察力を得られます。扶助協会で姉妹たちと交わることにより、愛にあふれた友情や共感を得ることができます。美しい音楽や靈感に満ちた文学はわたしたちを慰め、強めてくれます。

これらの行いは、神の御心を行おうとする気持ちと相まって、わたしたちの生活に主を招き入れることができます。そのようなことが起こると、わたしたちはほんとうにこう言うことができるのです。「主の愛を知りてはすべてをゆだねて 心の誠尽くさん みこころのままに。」(『賛美歌』172番) そのように主を信頼すると、わたしたちは次のような約束を受けます。「わたしはあなたがたを捨てて孤児とはしない。あなたがたのところに帰って来る。」(ヨハネ14:18)

●信仰を行使する、などの基本的原則を実践することは、個人的な試練を乗り越えるのにどのように役立ちますか。

●試練に遭っている人が慰めと平安を受けられるよう助けるには、どうしたらよいでしょう。□





# 平安を保つ

タマラ・リーザム・ベイリー

PHOTOGRAPH BY STEVE BUNDERSON



主は、わたしたちに平安を与えられました（ヨハネ14：27参照）。この賜物を分かち合うことによって、わたしたちは平安をもたらす者となることができます。

#### 個人的に平安を得るには……

- キリストを日々の生活の中心に据えるように努める。この堅固な土台により、心に平安がもたらされ、わたしたちはあらゆる点で強められます。
- 祈りと聖文の学習を毎日の習慣にする。
- 悔い改めの賜物を用いる。良心の呵責があるところに真の平安はありません。
- 自分をほかの人と比較しない。自分自身を受け入れ、そのうえで常に最善を尽くしましょう。

#### ほかの人が平安を見いだせるように助けるには……

- 家族を受け入れ、愛する。家族の一人一人について好きな点を見つけ、それらの資質に焦点を当てることです。家族のだれかを褒める機会があれば、見逃さないようにしましょう。
- 優しく話す。「優しく話せないなら、何も言ってはいけない」という格言を思い出してください。
- 人と口論せず、自分と異なる意見を自由に言わせてあげる。人によって考えが異なるからこそ人生は楽しいのです。皆に同意する必要はありませんが、人がそれぞれ異なった意見を持つ権利を認め、尊重することが大切です。
- 自分の意見は穏やかに述べる。
- 家族の祈りに加わる。祈る順番が回ってきたら、家族に平安と愛があるように祈ってください。
- 証を述べることによって平安の福音を分かち合う。
- ほかの人々が信じる宗教を尊重する（信仰箇条1：11参照）。
- 信仰を行動で示す。スポーツマンシップ、正直、そしてフェアプレーの精神は、平安を生み出す助けとなります。
- 奉仕する。ささやかな奉仕でも、人に平安をもたらすことができます。
- 断食献金をする。このお金は、困っている人々を助けるのに用いられます。この献金によって、そのような人たちの心に平安を与えることができます。
- 自分を不当に扱った人を赦す。
- 人に赦しを求める。
- 日々の生活で福音を広めたり、機会が訪れたときに専任宣教師として奉仕したりすることによって、自分の心の平安を人と分かち合う。□

# つかまつて!

七十人

ジェームズ・M・パラモア

ILLUSTRATED BY GREG NEWBOLD

**若**いころにフランスのパリで宣教師をしていたわたしは、エッフェル塔の最上階である102階まで行く機会が何度かありました。

エッフェル塔は1889年、万国博覧会の一部として完成しました。ところが完成した当初、何人かの人最上階から落ちて命を落としてしまいました。最上階を囲む柵が低すぎたからです。そこで、かなりの高さの金網入りガラスが張り巡らされ、人が落ちる可能性はまったくなくなりました。風の強い日、最上階は2フィート（約60センチ）ほど揺れます。立っていると怖くなりますが、それでも自由に歩いて遠くを見たり、写真を撮ったりできます。その間ずっと安心していられるのは、ガラスの囲いがあるからです。このように、ガラスの囲いは観光客を守り、人々にこの上ない安心感を与えてくれます。観光客はガラスの囲いがあると分かっているのです、心が落ち着くのです。

標準もこの囲いと似ています。標準は霊的な、またしばしば肉体的な攻撃からわたしたちを守ってくれる囲いのようなものと言えるでしょう。標準はどこにでもあります。わたしたちがこの世にきた瞬間から、人生のあらゆる場にその姿を見せています。標準は、わたしたちが完全な生活をし、成長し、能力を磨き、幸福になるために必要なものなのです。

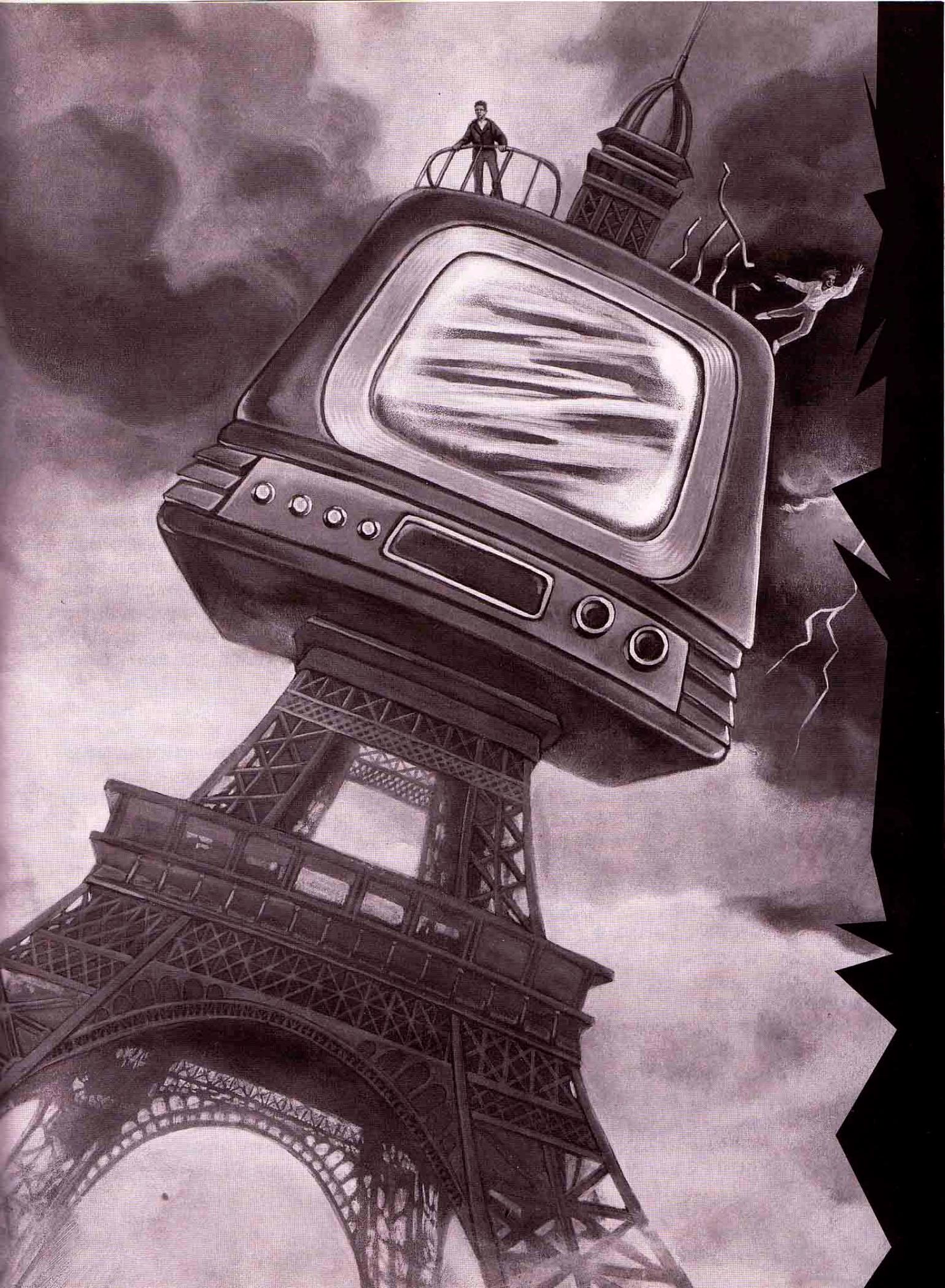
## 囲いがなくなるとき

長女がまだ赤ちゃんだったころのことですが、ベビーシッターが目を離したすきにははいはいを始め、床下に付けた暖房機の格子に触れて大やけどをしてしまいました。その格子は非常に高い温度になっていて、かなりひどいやけどでした。足には格子の跡が付いて、まるでワッフルのようでした。今でもその跡が少し残っています。この事故は必要な囲いがなかったために起きたのです。

わたしたちは前に、コンクリート基礎の建築基準をまったく無視して建てられた古い家に住んだことがあります。その家は年がたつにつれていろいろな方向に傾いてきました。それとは逆に、わたしの息子たちが家を建てたときには厳格な基準が設けられていて、家を建てる前に土地をならし、基礎固めをしなければなりません。こうして初めて、家の重量にも時間の経過にも耐えられる土台ができるのです。

## 選択の自由

わたしの友である皆さん、霊の体と心はわたしたちの体と同じように、体の中に取り入れるものによって造られていきます。最近の旅行中のことですが、妻とわたしは慣れない水を飲んだために何週間も病気になりました。心も同じです。心も、心の中に取り入れるものによ



って造られるのです。そして霊はわたしたちが体と心に取り入れるものに影響されます。

忘れないでください。人間は永遠だということを。人は死ぬと、霊と肉体が分かれます。そして肉体は生命のない状態になりますが、霊は生き続け、約束されたすべての祝福を受けることができるようになります。その祝福とは、この世で選択の自由を行使して天の御父が定められた標準を選んだ人々に約束される祝福です。

この美しい地球がわたしたちの住む場所として創造されたことを知ったときの、わたしたちの喜びを想像してみてください。また、わたしたちを安全に守ってくれる標準や範囲というものがある、わたしたちはそれなしにこの世に放置されることはないこと、そしてその標準は天の御父がすべての人のために与えてくださるものであり、時を経ても変わることのなかった真理であることを知ったときの、わたしたちの満足感を想像してみてください。主はこの十分な保護なしにわたしたちを放置されることはありません。ただ、その保護を受けるかどうかは、わたしたちの自由です。主はわたしたちに、道と、標準と範囲を示し、靈感と導きを与えてくださいます。そして、それを受け入れるかどうかを、わたしたちの選択の自由で任せてくださるのです。主は御自身が示す標準の中で、それらの原則が永遠のものであり、決して変わらず、信頼に足るもので、わたしたちを確実に守ってくれるものであることを明確にしてくださっています。ちょうどエッフェル塔のあの囲いのようです。

もし、今までわたしが述べてきた範囲にとどまれば、わたしたちは安全です。心の安らぎが得られます。しかし、たとえそうであっても、わたしたちは強制的に従うようには言われていません。選択の自由があるからです。古代の預言者ヤコブはこう言っています。「あなたがたは、自分の思うとおりに行動すること、すなわち永遠の死の道を選ぶことも、永遠の命の道を選ぶことも自由であることを覚えておきなさい。」(2ニーファイ10:23)

### 驚くべき科学技術の進歩

これらのことを考えるとき、大切な点が見えてきます。今日の科学技術の世界は、今まで見たこともないような驚くべき進歩の数々で成り立っています。このような進歩は、わたしたちの知識や理解を深め、そして成長を促してくれます。例えばメディアの発展ぶりは、信じられないほどの速さであり、かつてないほどのこの急激な進歩に、わたしたちは目を見張るばかりです。わたしが伝

道したのは44年前で、テレビはほとんど知られていませんでした。しかし、家庭に接続された一つのファイバー・オプティック・システムによって、何百もの局や情報源からのテレビやオーディオ、電話、コンピューターなどのあらゆる情報が入手できる日もさほど遠い先のことではないでしょう。教育や健全な娯楽にとっては大きな飛躍の機会です。

しかし、それは同時に、洪水のように押し寄せる不健全な娯楽への扉も開くことになります。わたしたちの思いや心に与える栄養を左右してしまうビデオや音楽などの形を取って、それらの娯楽はやって来ます。そして最終的には、わたしたちの心に存在する霊に影響を与えるのです。こうしたものは、わたしたちの標準を高めてくれるでしょうか。それとも低くするでしょうか。

科学技術の進歩はわたしたちの選択の自由をことごとく試みます。わたしたちはだれも見えていない所でも教会の標準を選び、それに従うでしょうか。制作される映画や娯楽の60パーセントから70パーセントがわたしたちの霊の成長にふさわしくない内容を含んでいる今の時代にあっても、標準を守れるでしょうか。そうです。今、主の標準を守れば、いつでも容易に守れるようになるのです。

### 明確な標準

大管長会は『若人のために』の中でメディアの標準を紹介しています。

「天父はわたしたち末日聖徒に、『どのようなことでも、徳高いこと、好ましいこと、あるいは誉れあること』を求めように勧告しておられます(信仰簡条1:13)。あなたが見たり、聞いたり、読んだりするものは、すべてあなたに影響を与えます。一般的な娯楽やメディアを通して、多くの良い経験をすることができます。それらはあなたを高め、励ますとともに、善なる原則、道徳的な原則を教え、この世の美に接する機会を与えてくれます。しかしそれらは、正しくないものを当たり前のように、あるいは楽しく、何の問題もないように、思い込ませてしまう場合があります。

ポルノグラフィは特に危険であり、習慣性もあります。好奇心に引かれて手を出しただけでも、やがてそれが習慣となり、もっと下品なものに手を染めたり、性的な罪悪に陥ってしまうことさえあります。ポルノグラフィを見続ける人は霊的な判断力を失い、良心による善悪の区別もつかなくなってきます。ポルノグラフィは、

主が定められた標準と範囲は、わたしたちに救いをもたらすものです。「主の道が義にかなっていることを覚えておきなさい。見よ、その道は人にとって狭いが、人の前にまっすぐであり、門を守る者はイスラエルの聖者である。」(2ニーファイ9:41)

実に多くの害悪をもたらします。自制心を弱めてしまうような考えを、あなたの心の中に起こさせるのです。

コンサート、映画、ビデオカセットなど様々な形の娯楽がありますが、下品なもの、不道德なもの、挑発的なもの、わいせつなものには、一切関係しないようにすることが大切です。『成人向け映画』という指定がないからといって、内容が健全かという点、そうとばかりも限りません。天父の定められた標準に添わないものであれば、すぐにその映画館から外に出る、テレビを消す、ほかのラジオ局に変えるという行動をとるようにしてください。ポルノグラフィや不道德を認める内容の本、雑誌、写真などを見てはいけません。

簡単に言えば、映画、本など、どのような形の娯楽であれ、疑わしいと思ったら、それを見たり、読んだり、関係したりしないことです。」(pp.11-12)

若人の皆さん、そして世界中のすべての教会員の皆さん、わたしたちは皆さんを愛しています。もしわたしたちが、特に主が定められた標準や範囲に従うなら、それはわたしたちにとって救いとなり、喜びとなり、心の安らぎとなるでしょう。主が定められた標準や範囲は、天の御父と救い主の真の姿を知るうえで鍵となるのです。なぜなら、主は「道であり、真理であり、命である」からです(ヨハネ14:6)。主の標準と定められた範囲を学び、それを守ろうではありませんか。そうすれば「聖者なる主のみもとに」行くことができます。「主の道が義にかなっていることを覚えておきなさい。見よ、その道は人にとって狭いが、人の前にまっすぐであり、門を守る者はイスラエルの聖者である。聖者はここには僕を使われ<sup>し</sup>ない。またその門を通る以外に、ほかの道はない。そしてその御方を欺くことはできない。その御方の御名は、主なる神だからである。」(2ニーファイ9:41) □



# アフガンに込められた思い出

ジャン・マレー・スミス

小さなことが

——例えば祈り、優しい言葉、1枚のアフガンでさえ——

ただの家屋を我が家に変えてくれます。

**わ** たしたち夫婦は14年前に結婚しました。そのとき、両親の優しい一人の友人から手編みのアフガン（訳注——ウールの柔らかい毛布または肩かけ）を頂いたのです。まったく知らない相手のために、たくさんの時間を費やして結婚祝いを作る方がいることに、わたしは驚かされました。

数日後、夫とわたしは新居に向かいました。12月の寒気からわたしの足を暖めてくれたのはアフガンでした。わたしはそっとなでて、柔らかい手触りを感じながら、これからの結婚生活が何をもたらしてくれるか思い巡らしました。

最初に住んだ家は小さなモーテルの一室でした。わたしたちはなべで作った食事を、窓の外に置いて冷凍保存しました。そんなブロック塀の部屋でも、アフガンは必要な家庭的な温かみを与えてくれました。

次に住んだ家は山の中の古い家でした。その年はとても寒い冬を過ごしました。夫は深夜1時まで働き、電話も引いてありません。まきをくべるストーブでは、一部屋しかないのにほとんど暖めることさえできませんでした。初めての妊娠で、つわりにも苦しんでいました。時々不気味な物音に脅える夜もありました。そんなときアフガンは避け所になってくれました。娘が生まれてからは幼い彼女と一緒に暖かいアフガンにくるまりました。その後も出産を終える度に、幼い子供たちと一緒にアフガンにくるまることになりました。

わたしたちは結婚後15回も引っ越しました。その都度、「我が家の思い出の箱」と書いたラベルをはって、特別な箱を一つ用意しました。箱の中には、絵や写真、そのほか新しい住みかが家族の住む場所となるような大切な物を全部入れておきました。アフガンを最初に入れておけば、旅行中ほかの物すべてが保護されます。わたした

ちはアフガンの入った箱を真っ先に荷ほどきます。

アフガンは母親としてのわたしの務めを、よく助けてくれるように思えます。病気の子や寒そうにしている子を、暖かくくるんでくれます。おじいちゃん、おばあちゃんを訪れるために遠くまで旅行したときもアフガンにくるまりました。独立記念日の花火の打ち上げ会場、秋の球技大会、夏のキャンプ旅行にもアフガンを持って行きました。家に来客があり、泊まるとなれば、アフガンは床の上なら子供を二人、大人であればソファの上で暖かく包んでくれます。わたしが病院に1週間入院したときも、4日間をキャンプで過ごしたときも、幼稚園の「宝物紹介」で午前中を過ごしたときも、いつもアフガンが一緒でした。家族はアフガンを取り合い、テントに利用し、頭からかぶってお化けのコスチュームにもなりました。

結婚祝いに贈られたトースター、ミキサー、なべ、ガラスのピッチャーはすべてなくなってしまいました。ところが、アフガンはもう古くなってしまいましたが、まだ暖かさを保っています。アフガンがなかったら、家族はどうしていただろうと、わたしは時々思います。

何年も前に、わたしはなぜ両親の友人がほとんど面識もないわたしたち夫婦のために、多くの時間を費やしてアフガンを作ってくれたのか、不思議に思っていました。でも今わたしは、その姉妹が彼女なりの親切なやり方で、自分の家庭を築く間に得た家庭管理の知識を与えてくれたのがよく分かります。アフガンの贈り物は、わたしたちが人生のチャレンジに直面するとき、ただの家屋を我が家に変えてくれるのは、例えば祈り、聖文を読むこと、音楽、抱擁、優しい言葉、そして1枚のアフガンのような、小さなことであると教えてくれたのです。□



# 喜びにあふれる プエルトリコの聖徒たち

プエルトリコを訪れる人々は暖かい気候と美しい風景に魅了されます。しかし、ほんとうの喜びは福音の中にしか見いだせないことをこの島に住む末日聖徒は知っています。

ラリー・ポーター・ガント

PHOTOGRAPHY BY DAVID AND LARENE GAUNT

プエルトリコを走る車のナンバープレートには「プエルトリコ——魅惑の島」という文字が刻印されています。プエルトリコはまったくこの言葉どおりの島です。縦横それぞれわずか90キロと260キロしかない小さな島ですが、島全体は非常に魅力的な風景で満ちあふれています。島の北

側にはルージュイオ山脈があり、その中でもひととき高くそびえる標高1,100メートルのエルフンケ山には熱帯雨林が生い茂っています。島の南側はやや乾燥した気候が支配しています。いずれにせよ、島のどこに立っても山か海あるいは山と海の両方を眺めることができます。年間を通じて摂氏15度から32度の温暖な気候を求めて、観光客が連日、飛行機や客船で島に押し寄せて来ます。海岸の砂浜に立ち並ぶ大きなヤシの木は貿易風を受けて葉を揺らせ、その葉音は花をいっぱいにつけた植物の芳香と混じり合って、周囲を華やいだものにしていきます。太陽光線が降り注ぐ日中は水泳やサーフィン、あるいは日光浴、夜になると笑い

声や音楽が鳴り響き、一日中人々を楽しませてくれます。けれども、この島に住む末日聖徒は教義と聖約第101章36節の聖句「この世ではあなたがたの喜びは満たされないが、わたしにあってあなたがたの喜びは満たされるからである」が、真実であることを知っています。

「わたしも以前は一日中友達と遊んでいたものです」と、カボロホで家具の製造業を営むオーランド・イリザリーは言います。「けれどもそうした生活に何か満ち足りないものを感じていました。わたしは妻のイルマと二人で、3人の娘たちにいつまでも価値が変わらないものを残してやりたいと思っていました。しかし、何を与えたらよいか分かりません。わたしはやがて、



このような思いについて祈り始めていました。ですから、宣教師が我が家を訪れたときに、わたしは宣教師と彼らのメッセージをずっと待っていたような気持ちになりました。今では、わたしたちの生活は福音がもたらした喜びであふれています。娘たちも福音をこの上なく大切にしています。』

現在、8つの地方部と52の支部に所属する1万4,000人の聖徒たちも同じ喜びを見いだしています。教会はここプエルトリコでしっかりと根を下ろしています。

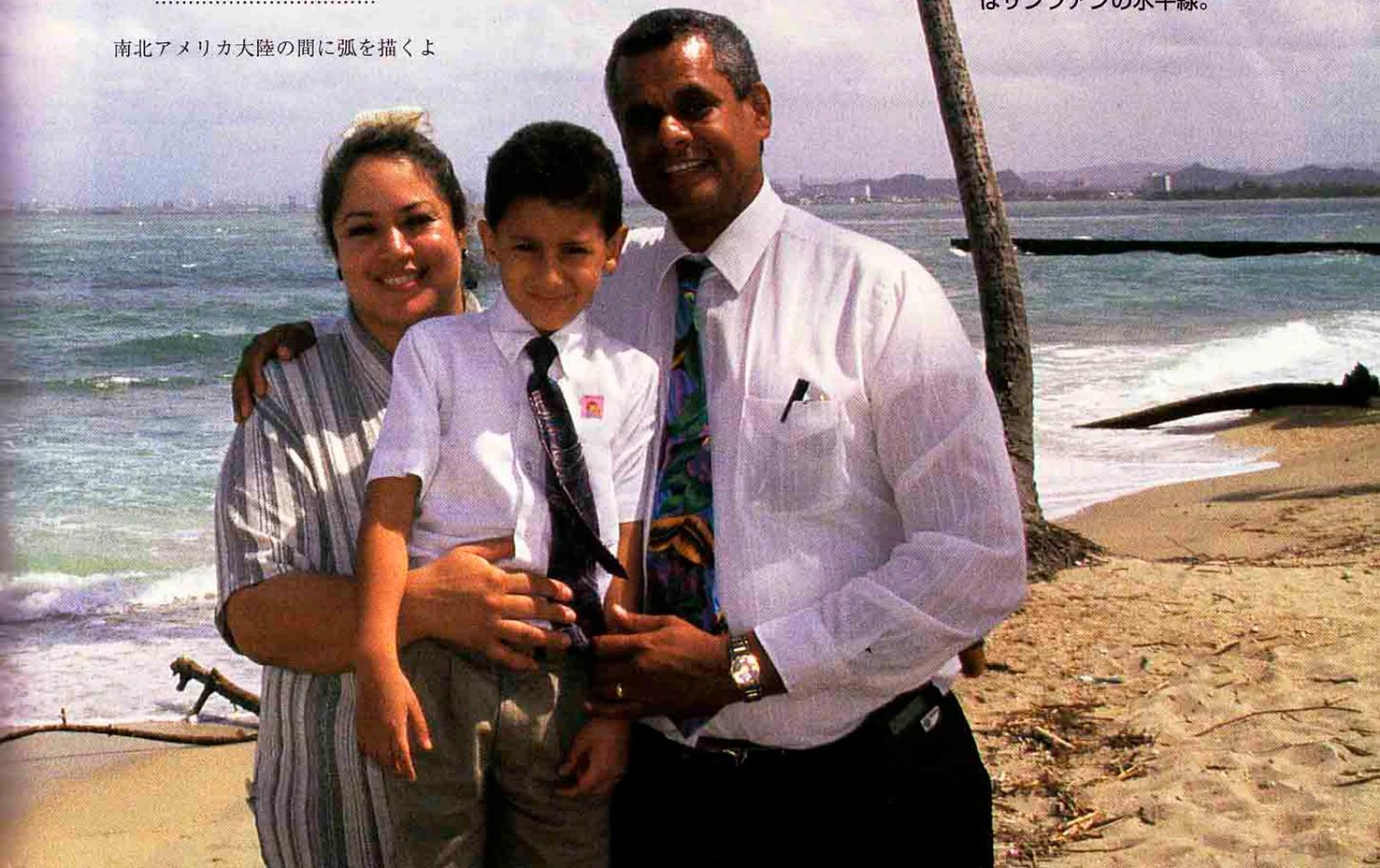
#### プエルトリコのあけぼの

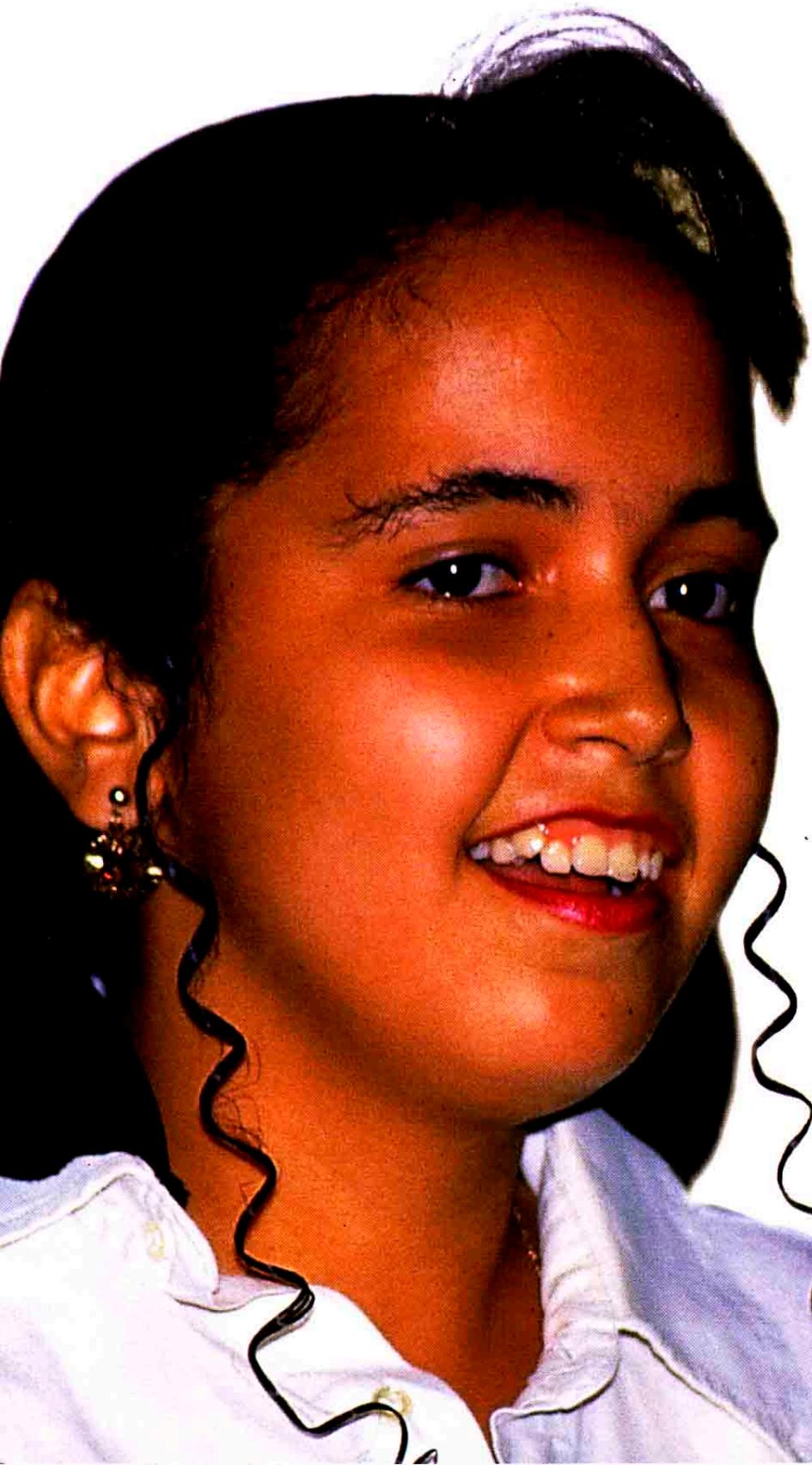
南北アメリカ大陸の間に弧を描くよ

うに島々を連ねた西インド諸島にクリストファー・コロンブスが到着したのは1493年のことでした。コロンブスは直ちにこの島々をスペインの領土とすることを主張しました。大きな島に錨を降ろしたコロンブスはそこをサンファン・パウティスタ（聖バプテスマのヨハネ）と名付け、1508年にはスペイン人の入植が始まりました。島でとれる金とさとうきびは入植者にとって大きな魅力でした。やがてこの島は「豊かな港」という意味のプエルトリコとして知られるようになりました。それから数世紀にわたって

プエルトリコは海賊船が横行した時代から植民地化された時代まで様々な興味深い歴史に彩られてきました。プエルトリコに移民して来た人々は、スペイン人、イギリス人、アフリカ人、アイルランド人、オランダ人、フランス人、アメリカ人、その他と多種多様です。その結果、プエルトリコ人は豊かな文化を受け

パイアモン支部の熱意あふれる指導者ブルーニ・モーレンとホセ・モーレン夫妻と息子のアルビ。背後に見えるのはサンファンの水平線。





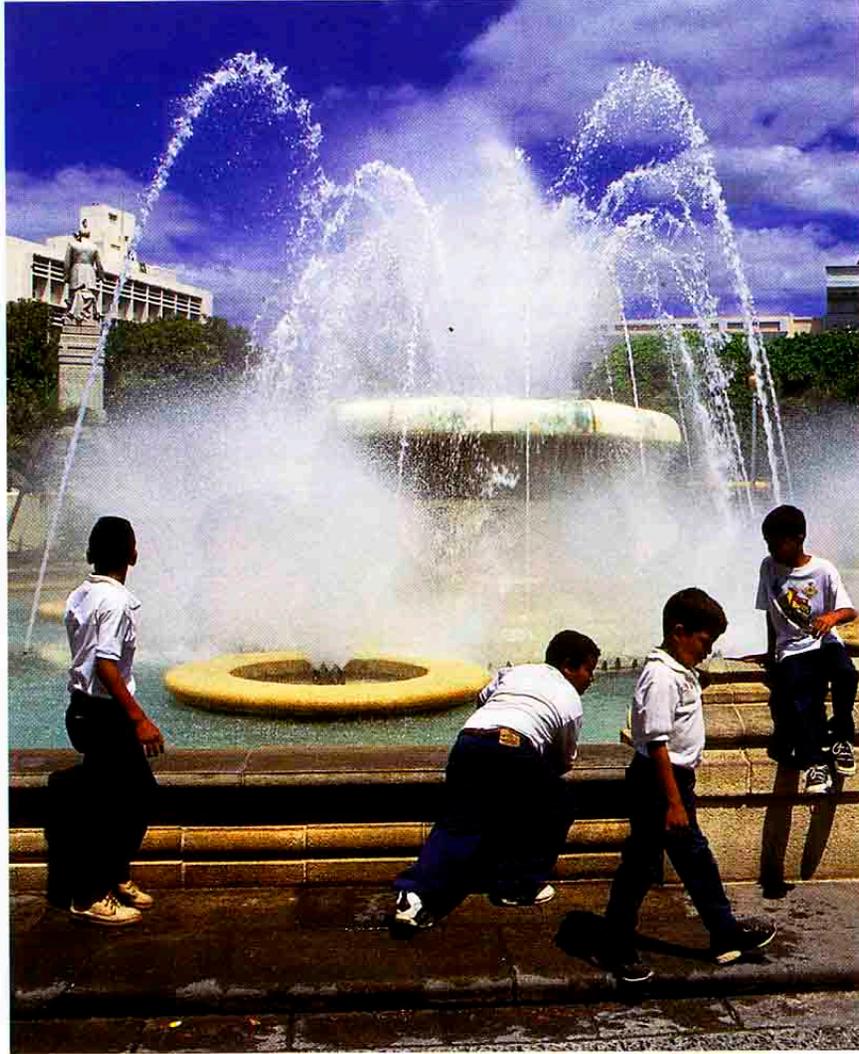
継ぐ民族となっています。1898年にスペイン・アメリカ戦争が終結した時点で、プエルトリコはアメリカの領土となりました。

教会がプエルトリコに足を踏み入れたのは、第二次世界大戦中に合衆国軍の基地が設置されたときです。最初の支部が組織されたのは1956年です。末日聖徒の軍人の家族のために組織されたため、集会は英語で行われていました。宣教師は島全体でわずか二人しかいませんでした。

マリア・クリスティーナ・ソサ・バークは、プエルトリコ人として最初にバプテスマを受けた人々の一人です。末日聖徒の軍人と結婚したマリアは1956年にバプテスマを受けました。バーク家の息子たちは8歳になったときにバプテスマを受けました。長男のウィリアムは1969年に、プエルトリコ人として初めて召された宣教師の一人として、ウルグアイで伝道しました。

1980年代になると、大勢のプエルトリコ人が教会に加わったため、スペイン語を話す会員が英語を話す会員よりも多くなりました。そして、サンファン（プエルトリコの首都）、カロリナ、ポンセ、マヤグエスの各都市でステークが組織されました。さらに教会員数が急激に増えたため、1993年12月に十

左——マリビード・アルバラド、ほかの10代の若人とともに伝統的なフォークダンスの保存に協力している。37ページ左上——カボロホのオーランド・イリザリーとイルマ・イリザリー夫妻。右上——アローイヨ一のコスメ家族。中央——ポンセ公園の噴水。



二使徒定員会のL・トム・ベリー長老はプエルトリコを訪れて、管理運営をしやすくするために4つの大きなステークを、8つの地方部に再組織しました。こうして多くの会員たちが、指導者としての資質を高める機会を与えられるようになりました。また、再組織によって支部の中には家族的な雰囲気が高まり、教会員の活発率も上昇しました。

「わたしたちが救われるかどうかは、ステークか地方部かという組織上の問題で決まるのではなくて、個人がどれほど努力するかにかかっているのです」と、プエルトリコ・サンファン地方部のウィリアム・A・パーク地方部長は語っています。

プエルトリコの教会には至る所で、新たな決意に燃えた聖徒たちがあふれています。ウーマカオのアンヘル・ロ

ドリケス-ネグロン支部長はこう言っています。「わたしたちはウーマカオ支部を少しでも天国に近づけたいと思っています。会員たちの心と意思には、これを成し遂げようとする意欲がみなぎっています。そのためには手引きどおりに教会を運営する必要があります。成功の秘訣はすべてその中にあるからです。」

小さいながらも熱意にあふれるこの支部で、オープンハウスを計画することになりました。福音の特色を9つの分野に分けて、それぞれの展示コーナーを作りました。しかし、オープンハウスに来てくれた人はたった一人でした。それでも会員たちはくじけませんでした。

「わたしたちは展示コーナーを作るに当たって基本的な教義を改めて見直しましたが、それが大変勉強になりました。楽しく協力しながら準備することで会員たちの気持ちが一つになりました」と、マリツァ・レイエスは言っています。「わたしたちはそのときの気持ちを大切に持ち続けました。後日、支部のピクニックに展示資料を持って行ったところ、大勢の人々が群がるようにして見てくれました。」

### 「心の中の愛」

「わたしたちの写真を撮ってもいいですよ」と、グエイナボ支部の会員が声をかけてくれます。「でも、わたしたちの心の中にある愛を、写真に撮ることはできないでしょう。」この地で教会が成功している理由は、プエルトリコの人々が持つ性格の良さにある、と言われているのはほんとうです。彼らは人々と交わり、人々に奉仕することを喜びとしています。イエス・キリストの福音は彼らの特質になじんでい

下——整列してフォークダンスの出番を待つポンセの若い男性と若い女性。39ページ左上——太陽光線を浴びて輝くサンファン海岸に彩りを添える、鮮やかな塗装を施された双胴船。右上——アレシボのムーニオス家族。右下——プエルトリコの旗。

るばかりでなく、彼らの持つ特質をさらに高めてくれます。

「幸せな人を見たいと思いませんか。だったらわたしを見てください」と、カペラ支部のアルベルト・ザイヤスが声をかけてくれました。「もちろんわたしにも問題がないわけではありません。けれども問題にどう対処したらよいか、答えを福音から見つけること

ができます。』

ポンテスーエラ支部のアンヘル・L・ガルシアはこう言います。「わたしが幸せなのは、わたしの生活の中にキリストがいらっしゃることに、祈りがこたえられることを知っているからです。」

1977年以來、カロリナ支部の会員であり、また二児の母親であるルーシ





一・カサブランカは次のように言っています。「教会に入る前からわたしたちは温かい家庭を築いていました。けれども、わたしたちは福音を学んで初めて、家族の関係とはどのようなものかを知ることができました。また福音によって、家族の関係を永遠に続けることができます。」夫のフーストは妻の言葉にうなずきながら、「教会の召しを喜んで果たし、いつも明るく、また福音に従って楽しく生活することが大切です」と付け加えてくれました。

指導者として人々の尊敬を集めているカサブランカ兄弟は、「有言」実行の人です。クリスマスの季節になるとカサブランカ兄弟は支部の大祭司を率いて、プエルトリコ伝統の「パーランダ」をします。カサブランカ家の家族全員はまず何家族かと集まり、ギターなどの楽器を手にしてクリスマスキャロルを歌いながら教会員の家を訪問します。彼らはその家に招き入れられて、1時間ほど一緒に食べたり、歌ったり、笑ったり、ダンスをしたりして過ごします。これが終わると訪問を受けた家族がグループに加わります。そして全員で別の家庭を訪問するのです。この「家庭訪問」パーティーは一晩中続けられて、最終的には50人から100人の大きなグループになります。「時にはあまり活発でない会員の家庭も訪れて、この楽しいキャロルに参加してもらおうようにしています」と、カサブランカ兄弟は話してくれました。

ここプエルトリコでは教会員全員が人と人との交わりを大切にしています。例えば、ボンセ第1支部の青少年はプエルトリコ伝統のフォークダンスを全員で練習します。そして彼らが発表するフォークダンスは、すべて自分たちの手で作った舞台装置と衣装に完

全にマッチしたすばらしいものです。

アレシボ支部の長老定員会会長であるノエル・ムーニオスはこの一致と奉仕の精神をはぐくむために、教会の活動にはできるかぎり活発に参加するように、家族を励ましています。「主がいつあなたに言葉をかけられるか、あるいは、あなたをいつ必要とされるかは、分からないからです」と、ムーニオス兄弟はその理由を説明しています。

「わたしはずっと、聖文の勉強を  
したいと思っていました」  
.....

この島の人々は生来、霊的に鋭い感受性を持っています。多くの人は、グーアイアニア支部のドーエル・イリザリーのように、夢を見たり、霊的な励ましを受けたりしたことがきっかけとなって福音に改宗しています。「1979年のことでした。わたしたち家族は『モルモン書』について祈ってみるよう宣教師から言われました。その晩、わたしは妻のクルーズ、子供のマリツァとエリックとともにひざまづき、『モルモン書』が真実かどうかを知るために祈りました。その後、わたしは同じ夢を3度見ました。そして次の日曜日に教会へ行くと、驚いたことに夢に現れた人に出会ったのです。そして、これが祈りの答えであると分かりました。」

ほとんどの教会員は、アレシボ支部のトーレス家族のように、家庭で聖典学習プログラムを行っています。ロベルトとミグダリア・トーレス夫妻は1984年にバプテスマを受けました。「福音によってわたしたちの考え、行い、話題、人々との接し方が変わりました」と語るのは、7歳から13歳まで

の4人の子供の父親であるロベルト・トーレスです。「宗教について子供に教えるのは親の責任だと考えています。わたしたちは毎朝、お祈りをし、聖文を読むことを日課としています。これによって子供たちはその日一日、正しい判断力を持ち続けることができます。わたしたち夫婦は悪を恐れなければならないことも子供たちに教えています。」

ミグダリアは、福音のおかげで母親としての責任を十分に果たせるようになったと、考えています。「子供たちをどう教育したらよいかを教えてくれたのは、扶助協会です。わたしたちの家族にとって、家庭の夕べはとても大切です。子供たちは家庭の夕べで責任を分担してくれますし、レッスンも手伝ってくれます。」

すでに霊的なプエルトリコの人々の霊性をさらに高めているものが、もう一つあります。それはセミナープログラムで、島中のすべての支部で行われています。教師のほとんどは召しを受けて働く教会員で、早朝セミナーを行っています。教師たちは



教えるだけでなく、5、6人の生徒を車で迎えに行き、セミナーに参加させ、そしてレッスンが終わると学校まで送り届けています。アレシボのムーニオ



左下の少年や右上の着飾った少女たちのように、子供たちは熱心に初等協会に出席している。左上は、家庭の夕べでフルートを演奏するアレシボのヌーリアとサラ・マルティネス。



ス姉妹はこう言っています。「わたしはずっと、聖文の勉強をしたいと思っていました。セミナーを教える責任を受けたおかげで、聖文を勉強できるようになりました。」プエルトリコには50人以上のセミナー教師がいます。彼らの働きによってセミナープログラムは、青少年だけでなく家族にも大きな影響を与えています。

トアバハ地方部のエルネスト・リベラ地方部長は霊的に成長することの

大切さを力説しています。「霊的な祝福を得るには、物質的な欲望を捨てなければなりません。ルカによる福音書第18章18節から25節に登場する大金持ちの青年のように、わたしたちもいつかは、この世のものと天父につけるもののうち、いずれかを選ばなければならない時が来るでしょう。そのとき天父を選ぶことによって、わたしたちは目標としている所へ到達できます。プエルトリコで教会が大きく発展するに

は、わたしたちの霊的成長が必要で  
す。]

プエルトリコでは社交性と霊性の共存が大切にされています。例えば集会やクラスで会員たちはともに笑い、ともに涙して話し、教え、福音の証を述べます。この活気ある霊性によって宣教師と会員たちの伝道は成功を収めました。アレシボ支部のムーニオス家族は1986年にバプテスマを受けて以来、会員伝道で大成功を収めています。

21歳のギセッテ・ムーニオスはこのように話してくれました。「バプテスマを受けてから家族全員が一生懸命に努力するようになりました。家族は一致しています。人をからかうことはなくなりました。家族がお互いに相手の気持ちを思いやるようになり、以前にも増して会話が多くなりました。福音のおかげでわたしたちは変わったのです。家族全員が人々と福音を分かち合いたいという気持ちになっています。」

1995年3月までに、近くに住む2家族がバプテスマを受け、ムーニオス姉妹の親戚からは数人が、ムーニオス兄弟の友人のうち3人が、そしてギセッテの友人から二人が、それぞれバプテスマを受けました。

多くの末日聖徒と同様にこの家族は伝道の喜びを見いだしました。最近、プエルトリコ・サンファン伝道部の部長の召しを終えたロナルド・E・ダイアーはこのように話しています。「会員たちは家族や友人に対して、以前よりも福音について話す努力をするようになりました。専任宣教師と一緒に働く会員の数が増えています。これこそ伝道プログラムを力強く前進させる鍵です。」

この伝道精神を身に付けた多くの若い男女が専任宣教師として召されてい

ます。メキシコ・シティーで伝道したグーアイアニア支部のマリツァ・イリザリーはこう言っています。「わたしはいつかは伝道に出たいという強い希望を持っていました。家族はわたしが伝道に出ることによって、大きな祝福を受けました。祖父母はわたしが伝道に出る準備を始めると、福音に関心を持つようになり、わたしが伝道に出る1週間前にバプテスマを受けたのです。」

プエルトリコの聖徒たちは、伝道活動に加えて、あまり活発でない末日聖徒が再び証を取り戻し、活発になるように助けるというチャレンジにも取り組んでいます。ボンセ第1支部の指導者はこのチャレンジに果敢に挑戦しています。彼らは「活発化大隊」に入隊する志願者を募りました。ボンセ第1支部のミケル・アルバラド・シニア支部長は次のように説明しています。「前もって決めておいた日の夕方に、全員が礼拝堂に集まりました。会員たちは二人一組になって、指導者からあまり活発でない会員の名前と住所が書かれたカードをもらいます。一組当たりの訪問は数軒にすぎません。2時間後に全員が礼拝堂に戻って、訪問の結果を報告しました。これはあまり活発でない会員の所在地を確認すること、彼らへの接触を再開するうえで非常に効果的な方法であることが分かりました。この最初の訪問に続いて、さらに訪問を重ね、支部に新たな活力が生まれています。」

ヤウーコ支部では活発化運動が第一優先で行われています。「わたしたちは訪問教師として、訪問先の教会員がキリストのもとに戻れるように、お祈りしています」と、リッツィ・ベレス姉妹は言っています。この支部の副支

部長は二人ともつい最近に副支部長に召されましたが、それまで活発な会員ではありませんでした。「わたしたちは彼らに愛を示し、頻繁に家を訪問して助けることができました。わたしたちの支部は会員たちのフェロシップのおかげで大家族へと成長しつつあります」と、ロドリゴ・ベレス支部長が話してくれます。

#### 「すべては主のものです」

プエルトリコの人々は、西インド諸島のほかの島民と比較して、やや高い生活水準を維持していると言われていいます。ほとんどの人は、セメントのブロックを積み上げ、塗装を施した壁と平らな屋根を持つ、平屋に住んでいます。これはカリブ海沿岸地域で猛威を振るうハリケーン対策のためです。家の内部は天上にファンが取り付けられ、窓はガラスをはめ込むのではなく、よろい戸で、床は涼しくするためにタイル張りになっています。ほとんどの家屋やビルの窓、ドア、ベランダには装飾風にアレンジした鉄の棒がはめ込まれています。これは装飾の意味と、ほとんど一日中窓を開け放しているため、防犯上の目的があります。

末日聖徒は普通、居間の壁の一面を写真や絵を飾る専用の壁にしています。キリストの絵、神殿の写真、子供や孫の写真、結び固めを受けた日に撮影した神殿の前に立つ家族の写真などが飾られています。夕食を終えると家族全員がベランダに出て、グアバやパイヤあるいはマンゴーの冷たいジュースを飲みながら、だんらんの時を過ごします。「コーキイー、コーキイー」という鳴き声が湿った夜の空気にこだまします。これは「コキイー」という

名の、プエルトリコにだけ生息する小さなかえるの一種で、夜になると競うように鳴き声を上げるのです。

プエルトリコの末日聖徒は、主から

受けている恵みに感謝し、集会でよく「主の恵み、人にも分かつたん」(『賛美歌』138番)を歌います。雇用状態がいまだに安定していないため、経済的に苦しんでいる人はまだまだ多くいます。

「いちばん大きな試しは<sup>じゅうぶん</sup>什分の一<sup>じゅうぶん</sup>です」と語るのは、ボンセ第1支部のビクトル・ゴンザレスです。「けれども妻のルーシーとわたしは、什分の一を納めるときにあらゆるものが、必要な分だけあるいはそれ以上に、与えられています。」ボンセ第1支部に所属するヘクター・ランドロンとデージー・ランドロン夫妻も什分の

一<sup>いち</sup>の原則に従うことで家庭生活に祝福がもたらされるのを知っています。ランドロン兄弟は12年前に「はしご」から落ちて、脚を2か所骨折しました。糖尿病を患っていたため、脚は元どおりになりませんでした。「いまだに脚は不自由です。このため経済的に苦しい状態が続いています。けれどもわたしたちは什分の一を納めています。そしてパンと魚のたとえのように、必要なものはいつも与えられています。」

このような経済的苦境を強いられているにもかかわらず、プエルトリコの支部は、心からの関心を寄せ合い、また惜しみなく与える会員たちであふれています。カバラ支部のヘクター・ア





ルバレスとアマリリス・アルバレス夫妻は決して裕福ではありませんが、自分たちが持っているものを人々に分かち合っています。二人は家計を切り詰めて、サンファンを見下ろすバイアモーンの丘に1軒の家を買うことができました。ところで、プエルトリコでは毎日のようにパーティーが開かれています。これは青少年にとって非常に大きな誘惑となっています。そこでアルバレス兄弟をはじめとする指導者たちは誘惑の多いパーティーに代わる社交の場を考えました。アルバレス兄弟は自分の家のベランダに、バーベキューの設備、流し、テーブル、いす、ピンポン台、ダンスができる広い場所を用意しました。きらびやかな装飾などはありませんが、青少年は毎日のようにアルバレス家に集まって楽しいひとときを過ごしています。

「ミ・カサ・エス・スー・カサ」(わたしの家は、あなたの家です)と、アルバレス兄弟は言います。「わたしが今していることは、ほかの人々が成長期のわたしにしてくれたことです。わたしが助けている青少年は、いつかほかの人々にも同じことをするようになるでしょう。」

アルバレス家の気前の良さは有名です。アルバレス家の地下にある小さな部屋は一時的な宿泊施設になっており、送り迎えつき、しかも悩み事の相談相手つきです。「ほかの人々の役に立てばよいのです。わたしは時間も家も自分のものだとは考えていません。すべて主のもので」と、アルバレス兄弟は言います。

1995年6月30日、ヘスース・ニエベスはプエルトリコ人として最初の伝道部長に召されました。ニエベス伝道部長が、カロリナで夫人と4人の子供たちとともにバプテスマを受けたのは、1977年のことです。伝道部長は次のように話しています。「明るい将来が見えてきました。わたしはプエルトリコの人々を愛しています。彼らは福音を愛しています。わたしたちはお互いを愛し、支えようとする気持ちがあるので、きっと成功すると信じています。」

プエルトリコの末日聖徒は、輝く太陽や海からそよぐ風が与える楽しみを、はるかにしのぐ喜びを知っています。福音はプエルトリコの人々が持つ最も優れた特質を呼び覚ました。そして、喜びにあふれる聖徒の「家族」が生まれています。□

左ページ—カバラ支部所属のヘクター・アルバレスとアマリリス・アルバレス夫妻の目は福音の光によって輝いている。左上—ファハールドの自宅でくつろぐラファエル・ディアズとルース・ディアズ夫妻（腰かけている）と娘のローレナとビアンカ。右上—ウーマカオの美しい海岸線。右下—自分たちの手で作った背景幕の前で、プエルトリコ伝統の歌とダンスを発表するボンセの若い女性。

## 力を合わせる プエルトリコの青少年

3月の日差しが降り注ぐある日の朝、プエルトリコ・トアバハ地方部の100人近くの若い男性と若い女性は歌を歌いながら、手車を押してモーナガス公園の険しい丘の頂上に着きました。これは手車で大平原を横断した、末日聖徒の開拓者の旅を体験するために計画された活動です。彼らは初めにスペイン語で「コモー・オス・ヘ・アマドー、アマド・ア・オートロス」と歌い、続いて英語で「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」（英文『賛美歌』308番）と歌いました。

前もって決めておいた地点で小グループに分かれると、若人は末日聖徒の開拓者の経験を記した本を朗読し始めます。朗読が終わったとき

には何人かが涙を流していました。やがて全員は立ち上がると、「グランデ・エレス・トゥー」（「わが主よ、わが神」『賛美歌』44番）を歌いながら再び行進を始めました。

カリブ海沿岸地域担当の教会教育部副部長のアルベルト・ザヤスはこのように述べています。「わたしたちが支払う犠牲はどれほど大きく思えても、開拓者が経験した犠牲と比べれば取るに足りないほど小さいことを、セミナーの生徒に理解してもらいたいのです。セミナーは青少年が証を強められるように助けています。ですからこの島のすべての支部に、セミナーが設けられています。またプエルトリコの二つの大学には、末日聖徒学生協会が設けられています。」

この熱帯のパラダイスに住むプエルトリコの青少年には、多くの活動を提

供しなければなりません。「ここはパーティーの島です。このため青少年は多くの誘惑を受けます」と、トアバハ地方部で若い女性の会長を務めるブルーニ・モレノ姉妹が言います。「わたしたちはダンスの会やパーティーをしょっちゅう開いて、青少年が世俗なことに心を奪われないようにしています。もちろん、これだけでは十分ではありません。青少年に様々なことを体験してもらう機会を計画しています。つい最近も、青少年に御霊を感じてもらうために、フロリダ州オーランド神殿まで行きました。神殿訪問はわたしたちが与えられる最も価値のある贈り物です。世俗的な社会は、このような贈り物ができません。」

マヤグエスに住むある若い末日聖徒は次のように話しています。「ぼくは15歳のときに、友達から無理強いされてたばこを吸い始めました。2週間た





## 石と神殿

って、これは自分が望んでいることではないと思うようになりました。」この若い男性は、ベッドの傍らにひざまづいて、天父に心を注ぎ出し、たばこをやめられるように、友達の脅しにもうまく対処できるように、願い求めました。彼は直ちに喫煙をやめました。けれども友達からのいじめは続いていました。「学校ではこれからも友達からいろいろ言われると思います。でも主の助けが必ずあって、うまく切り抜かれると思います。」

ナランヒト支部に集う18歳のジョナサン・ネグロンの言葉を聞いてみましょう。「確かにいろんなプレッシャーがあって、それに負けないようにすることは大変です。でも、ほくは『若人のために』のパンフレットを読んでから、福音に従って生活する力がわいてきました。誘惑に負けそうなきは、誘惑に立ち向かう力が得られるようにお祈りしています。」

ウーマカオ支部のブライアン・リオースは、青少年のときに教会に入りました。「もし福音を知らなかったら、今どのような自分になっているかと思うと恐ろしい気がします。わたしは『王国の軍隊』に加わるように召しを受けたと考えています。自分の命をかけても、福音と『モルモン書』を守ります。」

青少年に心からの関心を示す指導者たち、力強い影響力を及ぼしているセミナーとインステイテュートプログラムに、感謝しなければなりません。プエルトリコの青少年は「王国の軍隊」を前進させ、キリストのもとに集まるように助け合っています。□

1981年10月、シルビア・シエラは離婚を決意していました。「わたしはそれまで疑問に思っていた多くのことを考えるようになりました。『わたしは今なぜこの世にいるのだろうか。』『この世以外にほかの世界があるのだろうか。』ほかに答えが見つからないことはたくさんありました。このような経緯から『聖書』を読み始めました。『天の神は一つの国を立てられます。これはいつまでも滅びることがなく、……一つの石が人手によらずに切り出されて、……全地に満ちました』(ダニエル2:44, 34-35)を読んだとき、大きな希望がわいてくるのを感じました。

わたしはこの聖句を読んだとき、思わず叫び声を上げました。そして何とかしてその『石』を見つければ、答えを見いだせると思いました。けれども、それから2年近くたって、わたしはまだその『石』を探せませんでした。でも希望を持ち続けました。」

しばらくして、シルビアは末日聖徒の友人に連れられて教会へ行きました。「礼拝堂に入った途端、かつて経験したことのない何か偉大なものを感じました。扶助協会では『永遠の家族』というビデオを見ました。わたしは心の奥底からの声を聞きました。『これこそ、あなたが探していたものです。』」

シルビアはやがてバプテスマを受け、翌年にはワシントン神殿で自身のエンダウメントを受けました。「主はわたしのために大きな祝福を用意しておられることを初めて知りました。神殿はすべての祝福を備えています。わ

たしは祝福を受け続けたいので、ずっと神殿に行きます。」

現在はグーイナボ支部に集うシエラ姉妹の最大の望みは、神殿へ行くことです。彼女は神殿へ行く費用を稼ぐために、家の清掃をする仕事を3つ持ち、さらに道端で露店を開いて食料品を売る仕事をしています。「わたしは一生懸命働いていますが、苦痛ではありません。神殿へ行くために働いているのだと思うとかえって安らぎを覚えます。どれほどすてきなものでも、神殿の祝福に勝るものはありません。」

シエラ姉妹は最初の神殿訪問から戻ったとき、いつものように聖文を読みました。そして、教義と聖約第65章2節に目が留まりました。「神の王国の鍵は地上の人にゆだねられており、あたかも人手によらずに山から切り出された石が全地に満ちるまで転がり進むように、そこから福音は地の果てまで転がり進むであろう。」

「わたしは目からうるこが落ちた思いでした。『聖書』で読んだ石が福音であることが分かって、思わず泣きだしてしまいました。わたしはバプテスマを受けたときに、それとは知らずに石を見つけていたのです。わたしは<sup>あがな</sup>い主にとっても感謝しています。主が生きておられること、いつの日か主の顔を拝する日が来ることをわたしは知っています。」□

\*



# ジェニーの 奇跡

ビクター・W・ハリス  
ILLUSTRATED BY ROGER MOTZKUS



ジェニーが初めてセミナーのクラスへ入って来て、新しい教師であるわたしに「こんにちは」と言った日のことを思い出します。彼女は話すことがとても困難でした。はっきりと発音することができないため、何を言っているのかよく分かりませんでした。また、机へ向かうにも、びっこを引いて歩くのがやっとでした。最初の週は、わたしのクラスのほかの生徒たちに追いつこうと努力していましたが、彼女とどう接してよいか分からない様子のクラスメートたちから、たいていは無視されていました。でも彼女は、そのことに対して、特に不満を感じている様子もありませんでした。

ジェニーは発言しようとしたのですが、彼女の言うことが分かる生徒はほとんどいませんでした。鼻をかむのにも苦勞していましたし、時にはよだれをたらしたり、服

を汚したりすることもありました。わたしのクラスの生徒たちは、ジェニーのような人の必要や行動に慣れていなかったため、生徒の多くは彼女に近寄りたり、仲間に入れたりしませんでした。こうして結果的には、さりげなく無視する形になってしまいました。

しかし、障害を持ったジェニーの体の中に、鋭敏な感受性と愛に満ちた心があり、だれかに話を聞いて、理解し、受け入れ、愛してもらいたいと叫ぶ勇敢な精神が潜んでいることに生徒たちは気づきませんでした。さりげなくであろうと、そうでなかろうと、彼女は無視されるのが嫌だったのです。

ジェニーがクラスの生徒たちに話をさせてほしいと頼んできた日のことは、決して忘れられません。皆に何を話したいのかしら、と思いましたが、あのようなメッセージを伝えたかったのだとは予想もしていませんでした。

彼女はどもりながらこう言ったのです。「わ、わたしは……と、友達 が 欲しいの。一緒に、お弁当を……食べて くれる と、友達が……欲しいの。」

彼女が最後の言葉を言い終えると、クラスはしーんと静まり返りました。言いたいことを言い終えたら座るという通常のマナーには従わず、彼女は立ったまま、だれかが名乗り出してくれるのを待ちました。ついに、クラスの後ろの席に座っていたトレジャーが手を挙げて言いました。「ジェニー、わたしがあなたの友達になるわ。」すると、ジェニーは尋ねました。「お、お弁当の時間にも、わたしのそばに座ってくれる？」

トレジャーは答えました。「ええ、お弁当の時間にもあなたのそばに座るわ。」

「毎日？」ジェニーは尋ねました。

「毎日よ。」トレジャーは答えました。

この会話を聞いて、クラスの緊張はほぐれました。そして、トレジャーの友達のウェンディーも勇気を出して手を挙げ、彼女もジェニーの友達になりたいし、毎日お弁当の時間に一緒に座ると言いました。こうして「ジェニーの奇跡」が始まったのです。

翌日、トレジャーとウェンディーはお昼にジェニーと一緒に座り、学校の駐車場からセミナーの行われる建物までジェニーに付き添って歩きました。何週間か過ぎると、トレジャーとウェンディーは、ジェニーの話したいことをわたしたちが分からないときに、通訳し始めました。

ジェニーがほんとうはとても美しく<sup>さうめい</sup>聡明な人だということを生徒たちが分かり始めると、彼女を活動に誘い、家まで迎えに行き、彼女にとって困難な作業を助けるようになりました。あるとき彼女は、カートという名前の



若い男性とデートをした、と興奮した面持ちでわたしに話してくれました。彼女は言いました。「彼、とってもすてき。」それ以来、デートの回数も増え、さらに彼女は皆から認められ、いっそう楽しい毎日となりました。

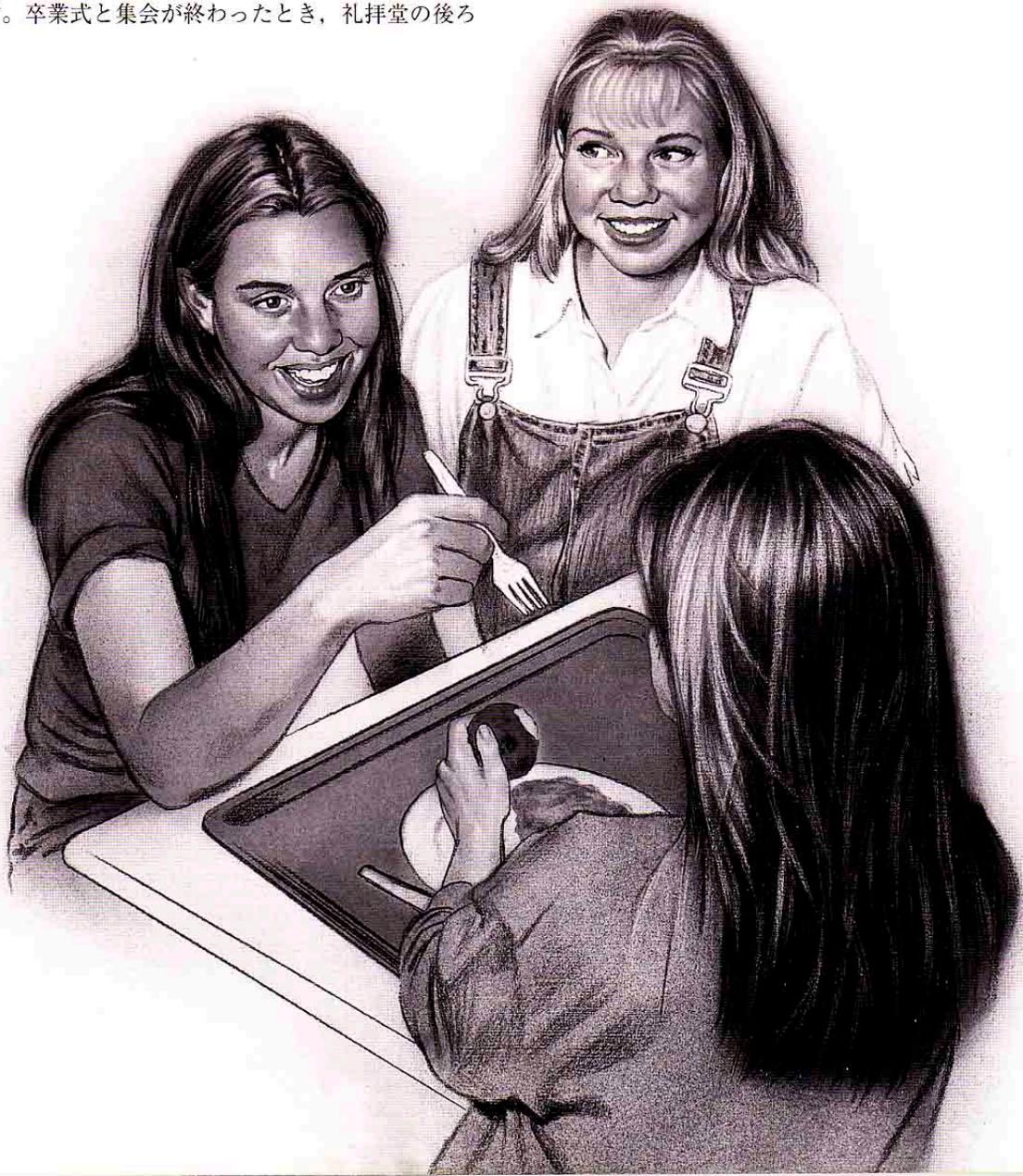
クラスでだれかが自分の感じていることを話し、泣きだすと、いつもジェニーは黙って立ち上がり、その人のそばへ行き、肩に手を回して抱いてあげるのです。この行為にわたしたちは感動し、すぐに全員が涙を流すのでした。ジェニーはクラスでよく証あかしをしました。多くの祝福、とりわけ家族に対して感謝を述べ、そしてイエス・キリストに対する確固とした信仰を分かち合ってくれました。

数年の時が流れ、ジェニーがセミナーを卒業する時が来ました。彼女が修了証書を受け取るために、ぎこちない足どりでわたしの前へ歩み出たときに感じた彼女への愛は、忘れることができません。そして、彼女がいかにわたしの生活に祝福をもたらしてくれたかを再認識したのです。卒業式と集会が終わったとき、礼拝堂の後ろ

でジェニーの母親に会いました。彼女は目を潤ませながら、こう言いました。「娘にあなたがしてくださったことが、どんなに素晴らしいことか、決してお分かりにならないでしょう。」

わたしはジェニーのクラスメートを指しながら、答えました。「いいえ、わたしじゃありません。見てください。あの子たちのおかげなんです。」

ジェニーのクラスメートは、彼女が自分はとても素晴らしい人であるということに気づくのを助けてくれました。友達ともだちの輪の中に入れてくれたのも、また、ほかの人に受け入れられたと感じさせてくれたのも、彼らです。障害を持つ彼女の心に隠された特別な必要、つまり受け入れられ、理解されたいという若い女性の気持ちを分かってくれたのも彼らです。彼女の心の美しさを見だし、現代の奇跡、ジェニーの奇跡を起こすのに貢献したのも彼らなのです。□





【『聖書』と『モルモン書』はキリストについて証している】 グレグ・K・オルセン作

「まことに、あなたがたに言う。『わたしには、この用いこない他の羊がある。わたしは彼らをも導かねばならない。彼らもわたしの声に聞き従うであろう。そして、ついにつの群れ、一人の羊飼いとなるであろう』とわたしが言ったその羊とは、あなたがたのことである。」(3ニーファイ15:21。ヨハネ10:16も参照)



「**ま**た、イエスは群衆に語って、『あなたがたの幼い子供たちを見なさい』と言われた。そこで彼らは、……天使がまるで火の中にいるかのような有様で天から降って来るのを見た。天使は降って来ると、幼い子供たちを取り囲み、……そして、天使は幼い子供たちに恵みを施した。」（3ネーファイ17：23-24）





スペイン・マドリッド。ゴードン・B・ヒンクレー大管長からスペイン・マドリッド神殿の鍬入れ式に招かれた二人の子供たち。出席者は、左からフランシスコ・J・ビーナス長老、ダリン・H・オークス長老、ヒンクレー大管長、アルベルト・テ・ラ・ヘラ・スペイン法務省宗務長官、ドナ・カルメン・アルバレス・アレナス・マドリッド副知事、ダニエル・バステラ・スペイン行政長官。

## ヒンクレー大管長、 多忙な日程で2大陸を訪問

**ゴ**ードン・B・ヒンクレー大管長は6月に86歳の誕生日を迎えたが、なおも意気けんこうで、聖徒たちと親しく交わり、証を分かち合い、戒めに忠実であるよう促すため、二大陸訪問の旅に出かけた。

ヒンクレー大管長は6月11日から16日まで、ヨーロッパの5か国を巡って、教会員と宣教師に語り、報道関係者ならびに各国政府の代表者と会見し、新しい神殿の鍬入れ式を行った。

### 歴史的なスペイン訪問

ヒンクレー大管長は6月11日、スペインのマドリッドに到着した。教会の大管長が同国を訪問するのは教会史上初めてのことである。スペイン滞在中、大管長は神権指導者との昼食会に出席し、スペイン・マドリッド伝道部の宣教師たちに親しく語りかけ、マドリ

ド・スペイン神殿の鍬入れ式でも話をした。

ヒンクレー大管長に同行したのは、マージョリー大管長夫人、十二使徒定員会のダリン・H・オークス長老とジューン夫人、七十人でありヨーロッパ西地域会長のディーン・L・ラーセン長老およびジュニール夫人、そしてこのほど七十人定員会会員に召され、スペイン出身の最初の中央幹部となったフランシスコ・J・ビーナス長老およびクリスティーナ夫人である。

「神殿にはほかでは得られない敬虔な雰囲気があります」とマドリッド南東部、モラタラスの神殿用地に集まった約2,000人を前にしてヒンクレー大管長は話し始めた。「ここに美しい神殿が建設されることを皆さんとマドリッド政府の方々に約束します。わたしたちは、神殿、ステーキセンター、宣教



デンマーク、コペンハーゲン。デンマーク滞在中、ヒンクレー大管長夫妻はフレデリクスボル城を訪れた。この城には、救い主の生涯を描いたカール・ハインリッヒ・ブロックの絵画が展示されている。ヒンクレー大管長は後日、「ブロックの作品は救い主を描いた絵画のうち、最も優れたものの一つです」と語った。  
PHOTOGRAPH BY SUSANNE PERKINS; PHOTOGRAPH BY JOHN L'HART, CHURCH NEWS



師訓練センター、そして教会員の必要を満たすために幾つかの建物を建設することにしています。美しい建物が建設されるとともに、神殿の周囲も美しく整備されることでしょう。この地は清く、神聖な場所となります。』

ヒンクレー大管長はスペイン全土とフランスおよびポルトガルの一部地域から集まった出席者に対して、次のように勧告している。「生活を整え、イエス・キリストの福音にいっそう忠実な生活を送り、皆さんの心に愛を満たし、家族をはじめ、交わる人々に愛を示してください。……わたしたちの忠実さの度合いは、どれほど福音に沿った生活を送っているかによって測られるのです。』

奉獻の祈りの後、ヒンクレー大管長をはじめとする参加者は鍬入れ式を行った。この鍬入れ式には少年少女各1人も参加し、順にシャベルを手にした。やがてヒンクレー大管長が敷地を後にする時が来ると、多くの会員たちは自分たちの国に主の預言者が初めて訪れた感激から、感極まり、声を出して泣く人々の姿も見られた。

### 回復のメッセージを聞く ベルギーの教会員

ヒンクレー大管長の一行は次にベルギーのブリュッセルに向かった。北大

西洋条約機構の合衆国常任代表であるロバート・E・ハンター大使と駐ベルギー合衆国大使アラン・ジョン・クリンケン氏らが空港で一行を出迎えた。

ヒンクレー大管長は6月12日正午から専任宣教師との集会に出席し、また夕方から開かれた集会ではブリュッセル地域から集まった約1,500人の教会員に話をしている。この集会に集まった多くの会員は少しでも大管長の姿がよく見える席を求めて、3時間以上も前から会場に詰めかけていた。

ヒンクレー大管長は説教の中で、前日に行われたマドリッド・スペイン神殿の鍬入れ式での様子に触れた。また会員たちの愛と祈り、忠実さをたたえる言葉を述べている。大管長はブリュッセルの聖徒に対して、教会員としての責任に心を向けるよう強く求めるとともに、回復の4つの目的について述べている。これは『教義と聖約』の中で以下のように明示されている。(1) あらゆる人は神権によりもたらされた驚くべき事柄を主の名によって告げ知らせることができる、(2) 信仰が地に増す、(3) 主の永遠の聖約が確立される、(4) 完全な福音が弱い者、純朴な

者によって世界の果てまで宣べられる(教義と聖約1章参照)。

### 福音に根を下ろすよう勧告を受けたオランダの教会員

6月13日、ヒンクレー大管長はオランダのハーグに向かい、専任宣教師との集会和、夕方から開かれた約2,000人の教会員が出席する集会でそれぞれ教えを説いた。一般集会にはオランダ国内の教会員とベルギー国内でフラマン語を話す教会員が出席した。

ヒンクレー大管長は子供を持つ教会員に対して、「夫婦はお互いに対して正直であると同時に誠実であってください。子供たちに対して感謝の気持ちを示し、子供たちが両親から離れていかなないように、また福音に根を下ろすように配慮してください」と述べた。また神権者に対して「決して卑しく下品な事柄に心を奪われることのないように、またあなたが受けている神権にふさわしく生活してください」と勧告した。

若人に対しては次のように述べている。「未来への希望は皆さんに託されています。福音の中にあなたの根を伸ばしてください。」大管長はまた、青年男女への勧告として、教会員の中から伴侶を探るように、「そうすれば幸せになる可能性は非常に高くなります」と述べた。

大管長は出席者全員に対して、学習と信仰により学問を得るように勧めている。「教育はわたしたちがこの世で成功するための鍵であり、来るべき世で祝福となるものです。……わたしたちの心と手の生産性を高めるように訓練する〔必要があります〕。……わたしたちのそうした努力は必ず報いを受けるでしょう。」

### 伝道のチャレンジを受けたデンマークの教会員

大管長の一行がデンマークのコペンハーゲンに到着したのは6月14日である。全国から集まった教会員のために集会が2度開かれ、さらに同地で奉仕する専任宣教師のための大会も開かれた。

ヒンクレー大管長は教会員に対する説教の中で、会員数を2倍にするようにというチャレンジを与えている。預言者は、この北欧系ゲルマン民族国家に福音を宣べ伝えた最初の宣教師ピーター・O・ハンセン長老に始まるデンマークでの教会の歴史をいかいつまんで話した。伝道開始後の数年間に26,000人以上が教会に加入した。しかし、事実上全員が合衆国に移民している。その後、デンマークの教会員数は5,000人当たりを上下し、1974年に最初のステークが組織されて以来、目立った成長を遂げていない。

「皆さんが5年間で会員数を2倍にできるとわたしは信じています。」ヒンクレー大管長は、コペンハーゲン・ステークセンターに集まった会員たちに語りかけた。彼らは長蛇の列を作って開場時間を待ち、ようやくの思いで入場していた。「わたしはほんとうにこのことを信じています。皆さんはただ、努力しては祈り、祈っては努力し、あらゆる機会をとらえて実行し、恐れを抱くことなく信仰をもって前進すれ

ばよいのです。」

ヒンクレー大管長はまた、会員たちに自らの証を述べ、彼らに対する愛と思いやりの気持ちを表した。

デンマーク滞在は1日だけであったが、ヒンクレー大管長はカール・ブロック絵画館として有名なコペンハーゲン北部のフレデリックスボル城を訪れて、デンマークの彫刻家バーテル・トールドセン作「キリストス」の実物と古代の十二使徒の彫刻を見学した。

### ドイツ国民へのメッセージ 「家族を強めなさい」

ヒンクレー大管長のヨーロッパ訪問の最後の目的地は、ドイツのベルリンで開かれた地区大会であった。ヒンクレー大管長は4時間の神権指導者訓練集会で2度話し、地域内の二つの伝道部から集まった専任宣教師に語りかけ、ベルリンの2大新聞社の代表者たちと会見し、さらに地区大会で全教会員に話をしている。

報道関係者との会見で、ドイツ人へのメッセージをと求められたヒンクレー大管長はこのように答えている。「神のもとに立ち帰り、神の導きを求めてください。……世界の至る所で標準の低下が見受けられます。家族の生活はばらばらになっています。わたしはドイツの人々に、家族を強めなさい、と申し上げます。家庭を父親と母親と両親から愛される子供たちがいる場所

にしてください。それは、家族全員にとって価値のあることを成し遂げるために一緒に祈る家族です。……いかなる国家も、家族が営む霊的な生活の水準を超えることはできないのです。」

大管長は地区大会での説教で報道関係者との会見に触れ、教会の大きな特徴として、報酬を受けない一般会員によって教会が運営されていること、また現在も啓示を受け続けていることへの信仰を挙げたことを明らかにした。

若人に対しては、汚れが蔓延している世の中にあっても道徳的に清く生活し、自分たちが受け継いでいるものを大切にするように、と勧告した。また、彼らは大いなる約束を受けた若者であると述べた。「若人の皆さん一人一人に申し上げたいのです。主の御業に関してあなたの家族が大切にしている伝統を守ってください。」

### 救い主の足跡をたどる

ヒンクレー大管長とマージョリー夫人はヨーロッパ旅行を終えると直ちにイスラエルに向かい、救い主が足跡を残された地で1週間を過ごした。イスラエル滞在中、大管長夫妻は以下の史跡を訪れている。フェストとアグリッパ王の前でパウロが教会を擁護した地カイザリヤ、古代イスラエルの北端の地ダン、古代メギド地域、イエスが成長された地ナザレ、多くの奇跡が行われた地域ガリラヤの海とカペナウム、



エルサレム。ベツレヘム郊外にある「羊飼いの野」を訪れたヒンクレー大管長夫妻。  
PHOTOGRAPH BY JOHN LHART, CHURCH NEWS

山上の垂訓が与えられた八福の山、救い主がバプテスマを受けられたヨルダン川、ヨシアの軍隊の叫び声によって壁が崩れ落ちた町エリコ、死海、死海写本が発見されたクムラン。

エルサレム地域では、ベツレヘムに近い救い主の生誕地、ベツレヘム郊外の羊飼いの野原、旧エルサレム市街、階上の部屋、ゲツセマネの園、ゴルゴタ、園の墓を訪れた。

ヒンクレー大管長は6月21日、エルサレム中東研究センターで開かれたファイヤサイドで話をしている。「エルサレムでは現在、この町が興されて3,000年を祝う行事が行われています。ここは非常に多くの意味を持つ、特別な場所です。エルサレムは世界のどこよりも多くの歴史を持つ場所ではないでしょうか。……

今日わたしはゲツセマネへ行ってきました。通りを横切って園へ入り、木陰に腰掛けて、聖文を読みました。そして、苦痛のために血の汗を流して御父に祈りをささげられた救い主に思いをはせました……。」

ヒンクレー大管長は、救い主ができればほかの方法を取りたいという願いを口にされたことを思い出していた。「救い主が園で味わった苦悩は、はり

つけにされたときの苦しみよりも過酷なものだったと思います。それは、人が不死不滅と永遠の命を得られるよう、神が定められた永遠の計画にあって、救い主が果たさなければならないことでした。また、地球の創造、地に人々を住まわせること、神の計画にあってそれは目的であり、すべてを左右するほど大切なことでした。……

救い主の偉大なメッセージには、主御自身が受けられた憎しみと争いに対して、愛と平和をもたらすという意味が含まれているのです。……わたしたちにとって、救い主が言われたことに耳を傾け、それに従う以上に大切なことはありません。もしわたしたちが主の弟子であるならば、心の中に葛藤を覚えたり、ねたみの気持ちを持ったりするはずはなく、卑しい思いが生じることはありません。これらの思いを芽生えさせてはならないのです。わたしたちはもう少し背筋を伸ばし、胸を張って、主が示しておられる方向を目指して歩みを進める必要があります。」

### 新任の伝道部長と 宣教師への助言

ヒンクレー大管長は、イスラエルから帰国した翌日の6月23日、自らの86

回目の誕生日を祝うその日に、新任伝道部長と夫人の訓練集会としては最も多い人数を集めた会合で話をした。「信じない者にならないで、信じる者になりなさい」(ヨハネ20:27)と勧告した後、ヒンクレー大管長は次のように述べた。「伝道部長として、皆さんが伝道地でなすべきことはただ一つです。それは宣教師たちの生活に、そして心と霊に救い主イエスへの愛を培うように努めることです。」

17か国から召された伝道部長たちは47か国の任地に向かうことになる。

伝道部長セミナーの約2か月前にヒンクレー大管長はソルトレーク・シティーの執務室から衛星放送を通じて同様の言葉を18,000人の宣教師に対して述べている。

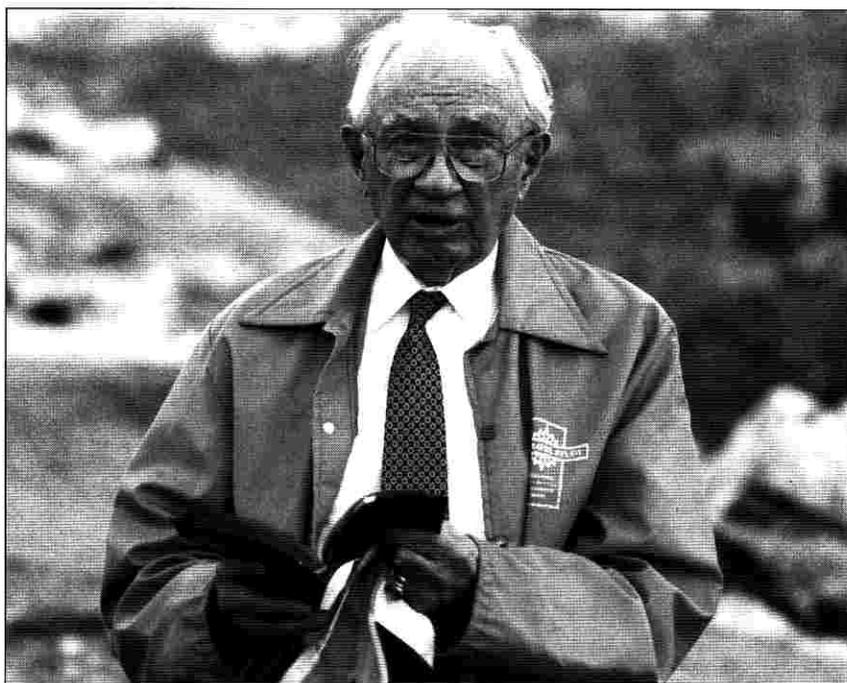
この4月26日の説教は、合衆国、カナダ、カリブ海沿岸諸国の101の伝道部で働く宣教師たちに向けて放送された。

ヒンクレー大管長は宣教師に向けたこの説教の中で、福音と伝道活動への燃えるような証を述べるとともに、自己を忘れて人々のために奉仕するよう勧告した。

「わたしは天におられるわたしの御父、あらゆるもののうち最も偉大な御方、永遠の御父、宇宙の神を愛しています。御父は偉大な全能者であると同時に、わたしの御父であり、皆さんの御父です。わたしは、御父がわたしたち一人一人を愛してくださっていることに感謝の気持ちを覚えます。御父が祈りを聞き、理解し、わたしたちを祝福してくださるという確信をもって、御父にお話しできることにも感謝しています。……

主の御業におけるわたしの同僚であり、わたしの友人であり、わたしの兄弟姉妹である皆さんを愛しています。天候にかかわらず、どのような環境に置かれていても皆さんは毎日毎日、偉大な奉獻の精神を心に抱いて、家の扉と心を開くすべての人々のもとへ行って、彼らに教え、祝福し、知識と証をもたらす業に従事しているからです。……

他人の救いのために働いている皆さんはそれによって自分自身を救ってい



エルサレム。ベツレヘム郊外にある「羊飼いの野」で救い主の降誕についての聖句を読むゴードン・B・ヒンクレー大管長。

るのです。利己的な気持ちが少なくなり、自己中心の癖や傲慢な態度が姿を消してきたと思います。自分が携わっている永遠の価値を持つ善い行いに思いをはせるとき、謙遜な気持ちが心に入り込んで来ることでしよう。」ヒンクレー大管長は主の御霊を願い求めるように勧告し、御霊を受けるにはふさわしくなければならないことを忘れないようにと注意した。

## 開拓者記念祭

6月24日、月曜日、ヒンクレー大管長は1867年に大管長の祖父がユタの南部に建設した砦、コーブ・フォートを訪れ、家庭の夕べファイヤサイドに集まった15,000人以上の人々に話をした。砦から少し離れた場所で車を降りたヒンクレー大管長夫妻は四輪馬車に乗り込みコーブ・フォートまでの道のりを先頭を切って進んだ。大管長夫妻の後ろには75台の100周年記念幌馬車隊が約1.5キロにわたって延々と続いた。これらの馬車はユタの州昇格100周年を祝うためにユタ州全域を巡ってここに到着したものである。

「聖徒たちがこの山間の盆地にたどり着くまでの旅に匹敵するような出来事をわたしはほかに知りません。示現でしか見たことのないこの山間の辺境の地に数千人もの人々を率いて来る大胆さは、驚くべき勇気の所業と言うほかありません。」

ヒンクレー大管長は開拓者が経験した信仰と苦難の物語を幾つか紹介した後、自分自身の祖父がブリガム・ヤング大管長から派遣されて要塞を築くためにこの地に来た次第を紹介した。ヒンクレー大管長は、祖父と同じように開拓者として働いた人々に対して大きな愛を抱いていると述べた。「[わたしたち自身は]いかなる費用も代価も支払うことなくわたしたちの手に伝えられてきた受け継ぎを持つ者として、ふさわしい生活をしたいと心から願っています。わたしたちの宗教には開拓者たちによってどれほどの代価が支払われてきたかを忘れないようにしていただきたいと思います。」

数日後の6月29日、ヒンクレー大管長はユタ州100周年記念行事の一環と



エルサレム。ヒンクレー大管長夫妻は、園の墓も含め、聖地でとりわけ神聖な場所とされる数々の地を再度訪問した。PHOTOGRAPH BY JOHN LHART, CHURCH NEWS

して「デイス イズ ザ プレイス州立公園」を再奉献した。この奉献の式典には、ヒンクレー大管長とマージョリー夫人、トーマス・S・モンソン第一副管長とフランセス夫人、ジェームズ・E・ファウスト第二副管長とルース夫人が出席した。

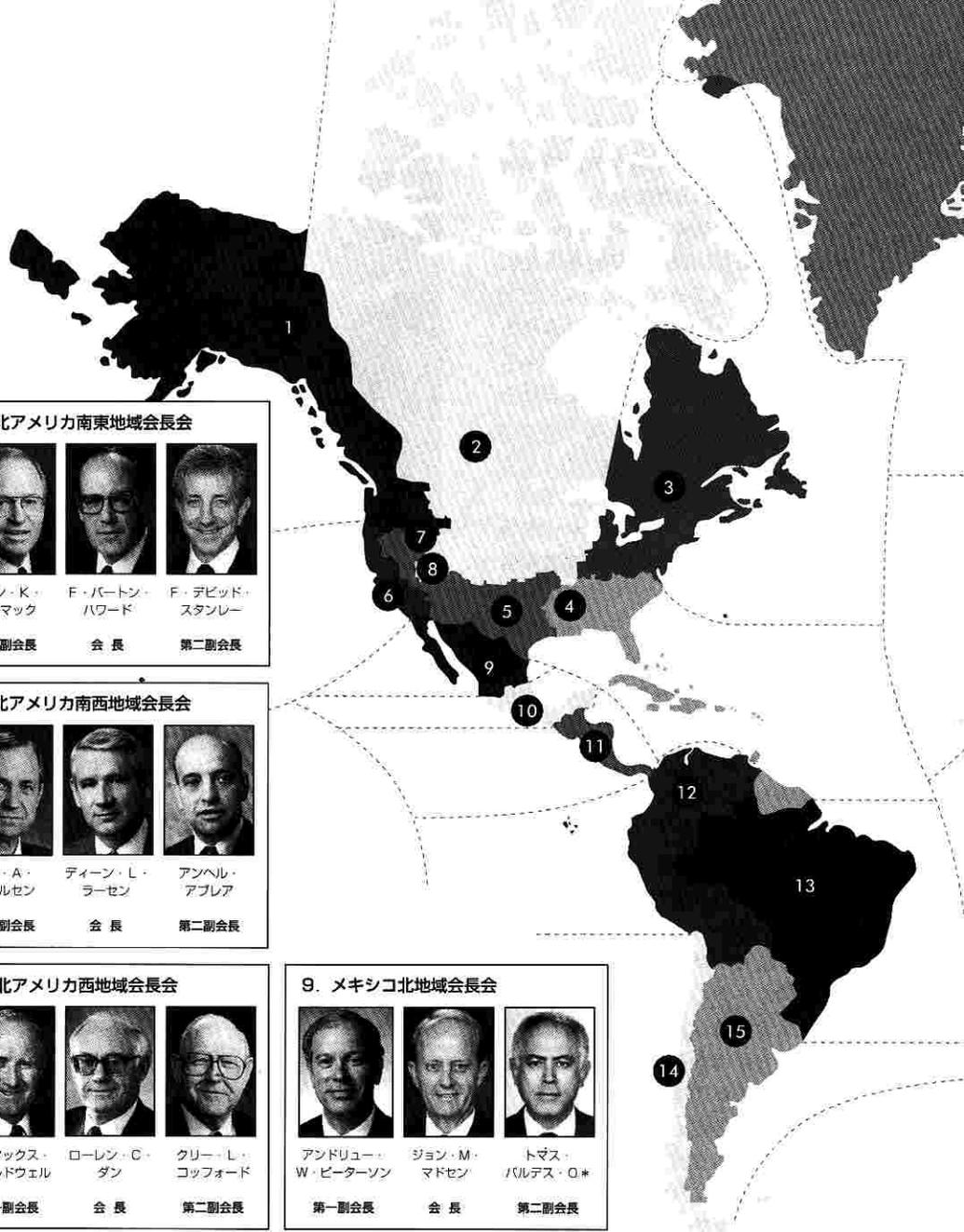
「わたしたちの後ろに建つ記念碑は心を奪われるばかりの美しさをたたえています」とヒンクレー大管長は話し始めた。「この記念碑はわたしたちが愛する州の歴史を彩る数々の偉大な出来事に対する称賛の気持ちを表しています。」ヒンクレー大管長は州の歴史をかいつまんで紹介した後、彫像が持つ多くの象徴とその意味を説明した。また、初期の時代にこの地に来て、去

って行った人々も大勢いたことに触れ、「しかしながら、モルモンの開拓者たちはこの地へ来て、留まりました。彼らは太陽の照りつける固い地面を掘り起こしました。そして近代的な灌漑方式を開発しました。開拓者たちは都市計画を実施し、家屋、学校、公共施設、文化施設、偉大なタバナクル、そして壮大な神殿を建設しました。彼らはこの都市を建設しました。そして現在ユタ州となっているこの地域に数百に上る集落を築きました。さらに、カリフォルニア州、ネバダ州、アリゾナ州、アイダホ州、ワイオミング州で最初のアングロ・サクソン民族の定住地を築いたのです。」□

# 新たに組織された 地域会長会

この度、地域会長会の再編成が大管長会より発表された。この変更は1996年8月15日から発効となる。

また、現在の南アメリカ南地域の分割に伴い、新たにチリ地域が組織されたこと、10人の地域幹部が地域会長会の副会長としてその任に当たることも発表された。ちなみに昨年は3人の地域幹部が地域会長会の一員として働いた。(\*印は、地域幹部)



## 4. 北アメリカ南東地域会長会



ジョン・K・カーマック 第一副会長  
F・バートン・ハワード 会長  
F・デビッド・スタンレー 第二副会長

## 5. 北アメリカ南西地域会長会



リン・A・ミケルセン 第一副会長  
ディーン・L・ラーセン 会長  
アンヘル・アブレア 第二副会長

## 1. 北アメリカ北西地域会長会



ウィリアム・ロールフ・カー 第一副会長  
グレン・L・ベイス 会長  
C・スコット・グロー\* 第二副会長

## 6. 北アメリカ西地域会長会



C・マックス・コールドウェル 第一副会長  
ローレン・C・ダン 会長  
クリー・L・コッフオード 第二副会長

## 9. メキシコ北地域会長会



アンドリュー・W・ピーターソン 第一副会長  
ジョン・M・マドセン 会長  
トマス・バルデス・O\* 第二副会長

## 2. 北アメリカ中央地域会長会



J・リチャード・クラーク 第一副会長  
ヒュー・W・ピノック 会長  
V・ダラス・メレル 第二副会長

## 7. ユタ北地域会長会



ロバート・E・ウエルス 第一副会長  
アレクサンダー・B・モリソン 会長  
ロバート・K・デレンバック 第二副会長

## 10. メキシコ南地域会長会



ゲアリー・J・コールマン 第一副会長  
D・トッド・クリストファーソン 会長  
オクタビオ・テノリオ・O\* 第二副会長

## 3. 北アメリカ北東地域会長会



W・ドン・ラッド 第一副会長  
ボーン・J・フェザーストーン 会長  
マーリン・K・ジェンセン 第二副会長

## 8. ユタ南地域会長会



L・ライオネル・グンドリック 第一副会長  
ベン・B・パンクス 会長  
デニス・B・ノイエンシュバンダー 第二副会長

## 11. 中央アメリカ地域会長会



リノ・アルバレス 第一副会長  
ウィリアム・R・ブラッドフォード 会長  
フリオ・E・アルバラド\* 第二副会長



18. ヨーロッパ西地域会長会



ニール・L・アンダーセン 第一副会長  
 ディーター・F・ウークトドルフ 会長  
 ジーン・R・クック 第二副会長

19. アフリカ地域会長会



デニス・E・シモンズ 第一副会長  
 ジェームズ・O・メーソン 会長  
 クリストフェル・ゴールドデン・ジュニア\* 第二副会長

20. アジア北地域会長会



レックス・D・ピネガー 第一副会長  
 デビッド・E・ソレンセン 会長  
 L・エドワード・ブラウン 第二副会長

21. アジア地域会長会



ジョン・H・グローバーク 第一副会長  
 戴國源 (タイ・クオック・ユン) 会長  
 黄松熙 (ウォン・チュンヘイ)\* 第二副会長

12. 南アメリカ北地域会長会



フランシスコ・J・ビーナス 第一副会長  
 ジェイ・E・ジェンセン 会長  
 カール・B・プラット\* 第二副会長

14. チリ地域会長会



ジェラルド・L・テラー 第一副会長  
 F・メルビン・ハモンド 会長  
 エドワード・A・ラマルティネ\* 第二副会長

16. ヨーロッパ北地域会長会



ジョン・E・ファウラー 第一副会長  
 セシル・O・サミュエルソン・ジュニア 会長  
 スペンサー・J・コンディー 第二副会長

22. フィリピン・ミクロネシア地域会長会



シェルドン・F・チャイルド 第一副会長  
 ケネス・ジョンソン 会長  
 クエンティン・L・クック 第二副会長

13. ブラジル地域会長会



W・クレイグ・ズウィック 第一副会長  
 ダラス・N・アーチボルド 会長  
 クラウディオ・R・M・コスタ 第二副会長

15. 南アメリカ南地域会長会



カーロス・H・アマソー 第一副会長  
 ジョン・B・ティクソン 会長  
 ビューゴ・A・カトロン\* 第二副会長

17. ヨーロッパ東地域会長会



ブルース・D・ポーター 第一副会長  
 チャールズ・ディティエ 会長  
 F・エンツィオ・ブッシュ 第二副会長

23. 太平洋地域会長会



ブルース・C・ヘーフェン 第一副会長  
 ローウェル・D・ウッド 会長  
 P・ブルース・ミッチェル\* 第二副会長

# 再組織された札幌西ステーキ会長会

去る8月4日、アジア北地域会長会のサム・K・島袋第一副会長管理の下に開催された札幌西ステーキ大会で、1990年5月よりステーキ会長の責任を果たしてきた佐藤義紀兄弟が解任され、新たに小野誠兄弟（写真中央）が召された。第一副会長には坂本一彦兄弟（写真左）が、第二副会長には丸中淳兄弟（写真右）が召され、その任に当たる。



## 2マイルの精神で仕えるときに

——主への思いと感謝の念が芽生えて——

札幌西ステーキ会長  
小野 誠

**19**78年の初秋、みぞれが降る寒い午後でした。チャイムの音に玄関に出てみると、りゆうちょうな日本語を話すアメリカ人の若者が二人立っていました。今まで何度も訪問を受けては断り続けていたのに、その日に限って妻に代わりわたしが対応し、今回の訪問を承諾したのでした。しかし、それは社交辞令のつもりであったことは今でも覚えています。

その日から毎週のように我が家で福音を学び始めましたが、彼らの方から約束をたがえることは決してありませんでした。福音への興味というより、誠実な若いアメリカ人の友達ができた喜びが大きかったから続いたのかもしれない。

彼らといると心が安まり、自分が清められていくのがよく分かりました。「わたしのいましめを心にいだいてこ

れを守る者は、わたしを愛する者である。わたしを愛する者は、わたしの父に愛されるであろう。わたしもその人を愛し、その人にわたし自身をあらわすであろう」(ヨハネ14:21)と記されているように彼らの行いは、まさしくこの聖句そのものでした。

翌1979年6月にバプテスマを受けるまでの間、わたしたち夫婦を導くために二十歳そこそこの彼らが、どれほどの信仰を用いたかを知ったときは、彼らがすでに帰国した後でした。そんなとき、ふと周りを見渡すと、彼らから受けた優しさや誠実さ、勇気に対する恩返しの方がたくさんあることに気づきました。責任を通して働くときに、感謝、笑顔、喜びなどを今度は教会の兄弟姉妹から頂けることを知ったのです。

「もし、だれかが、あなたをしいて1マイル行かせようとするなら、その人と共に2マイル行きなさい」(マタイ5:41)とあるように、ほんのわずか

なことに対してもこのような思いで行うときに、思いもかけないところでたくさんの祝福を頂きました。微力であっても人のために尽くすとき、また夢中で行っているとき、気がついたら自分自身の問題がいかに小さなものであるかを実感するのです。その度に、主への思いと感謝の念が少しずつ自分の内に芽生えてきました。

現在、札幌西ステーキには11のワード、支部があります。いちばん遠いユニットで片道車で5時間かかります。訪問、指導者会、ステーキ大会など兄弟姉妹の献身的な働きと犠牲を目にするとき、ほんとうに頭が下がる思いです。神殿参入も同じことが言えます。車で5時間かけて空港までやって来る彼らの信仰を目にするだけで自らの証が強められます。

苦難や困難を避けて通りたいのは、だれでも同じです。しかし、それらを抱えることが不幸とは限りません。主の福音の法則では、それらを自分の成長の糧に、ひいては祝福に変えることができることを証します。(おの・まこと)

\*

## 小野 誠ステーキ会長の紹介

1951年、北海道美唄市びばいに生まれる。私立岩見沢商業高校卒業後、食品会社勤務。28歳で改宗。1976年に村田美知子と結婚。息子が1人、娘が3人いる。これまで、ステーキ副会長、高等評議員、監督、大祭司グループリーダー、若い男性会長、日曜学校教師などの責任を果たしてきた。札幌ステーキ手稲第一ワード所属。

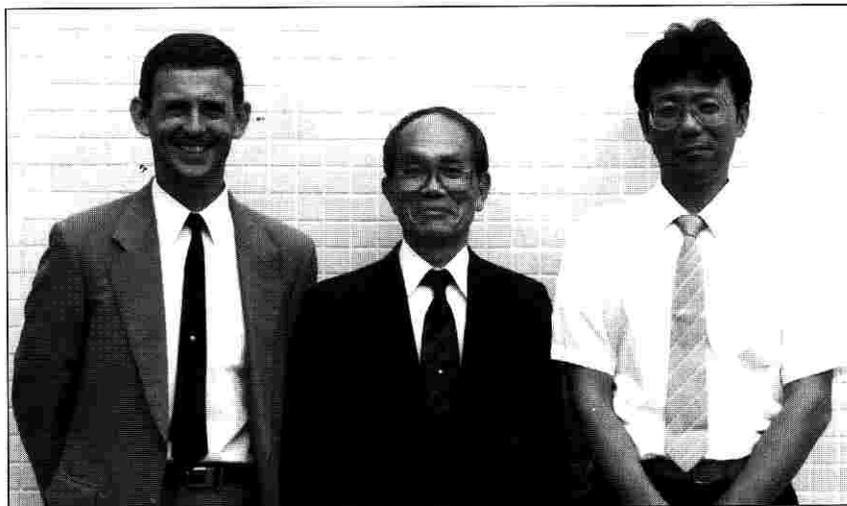


小野ご家族  
長女(綾子姉妹)はプリガム・ヤング大学ハワイ校に留学中



# 再組織された福岡伝道部鹿児島地方部長会

去る7月21日、福岡伝道部のL・ドワイト・ピンコック部長管理の下に開催された鹿児島地方部長会で、1992年4月より地方部長の責任を果たしてきた永友裕兄弟が解任され、新たに山口薫兄弟(写真中央)が召された。第一副部長にはデニス・ピーターソン兄弟(写真左)が、第二副部長には川原健郎兄弟(写真右)が召され、その任に当たる。



## 主の御言葉に従いつつ

——「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である」——

福岡伝道部鹿児島地方部長  
山口 薫

ハワイでの専任宣教師としての任期も終わり、帰路ソルトレークに立ち寄って教会本部を訪ねたり、また友人知人と久しぶりの再会の時を喜び合ったりしながら数日を過ごしました。

鹿児島の実家にたどり着いたのが5月7日、家の内外とも荒れていまし

た。約10日後の安息日に福岡伝道部のL・ドワイト・ピンコック部長から面接をしたいとの連絡を受け、隣接の谷山支部へ赴きました。

途中わたしたち夫婦は「専任宣教師解任のための面接だね」と、そんな会話を交わしました。わたしたち夫婦は、しばらく郷里で静養した後、次なる夫婦伝道へと出るつもりでした。しかし面接が始まって伝道部長の口から出た言葉は、まったく予期しなかったもの

でした。「新しく鹿児島地方部の部長に召したいと思います。あなたに受けていただきたいのです！」

ハワイに住む多くの帰還宣教師たちから「帰還してからしばらくの間は召しはないよ」と聞かされていました。「日本でもあるいは？」と抱いてきた我々夫婦のかすかな期待は、あえなく消え去ってしまいました。

「えーっ、年輩のわたしにですか。ほかにも計画中のこともありますので……」と申し上げると、「そうですね。よく祈って、後日返事を下さい」という伝道部長の返答でした。

さて「常に奉仕を」とは、日々のわたしたち夫婦の目標でもあったのです

## 山口 薫地方部長 の紹介

1930年、鹿児島市に生まれる。鹿児島大学工学部卒業。1950年から1986年までNTT勤務。1959年に鶴田和子と結婚。現在2男1女の子供と6人の孫がいる。これまで支部長、副地方部長、東京神殿宣教師、ホノルル伝道部専任宣教師などの責任を果たしてきた。鹿児島支部所属。



山口ご夫妻

が、考えてみれば、別の地へ奉仕に行くも地元の地方部で奉仕するも「奉仕」という業に変わりはないはずです。ただ、すでにいくらか接触が続いていた関係機関から中止の了解を得なければなりません。4週間後、伝道部長と再び面接の機会を得て、この地での奉仕の召しを受けることを報告しました。

わたしの父は、20歳（明治39年）のときに日本を離れ、ハワイに引き続いてカナダでも働きました。6年ほど遅れて母は、神戸から単身で1か月以上太平洋の船旅を続け、バンクーバー港にたどり着きました。そして出迎えた父と地元の教会で結婚式を挙げました。以来両親はキリスト教会に集うようになりました。それから約20年間、彼らはその地で懸命に働き、昭和4年に帰国し、翌年わたしが生まれました。

物心つくころ、家の書棚には『聖書』が並べられており、時折それを読んでいた両親の姿を今も遠く記憶しています。このような環境の中で、イエス・

キリストとの出会いが始まりました。世が軍国主義に染まるころ、両親は『聖書』を書棚の奥に隠しました。

終戦後、わたしはYMCA（キリスト教青年会）に参加して学生時代を過ごしました。結婚し長男が中学生となるころ、モルモンの宣教師が我が家を訪れました。それから1年半にも及ぶ長いレッスンの末、わたしたち家族はバプテスマフォントの水に沈みました。

わたしの職場は転動が多く、そのため一か所に長く住むことはありませんでした。56歳（定年4年前）のとき、末子が大学を卒業するので、わたしも会社を勇退（？）させてもらいました。が早速東京神殿の宣教師として召しを受け、それから通算7年間にわたり奉仕させていただきました。サム・K・島袋、ラッセル・N・堀内、友末・安保、ウォルター・繁雄・照屋神殿長、さらに短い期間ではありましたが菊地良彦神殿長という5人のすばらしい指導者の下、聖き宮にあって終日生者、

死者への奉仕の業に専念できました。

さらに引き続いて専任宣教師としてホノルル伝道部で福音を宣べ伝える18か月の機会を与えられたことは、まさにわたしたち夫婦にとって大いなる祝福であり、まことに身に余る光栄であったと感謝しています。

今わたしはこの責任を受けるに当たり、この大いなる御業は、時の初めから主によって計画され、真に人々を幸せに導くものであることを謹んで証します。この地に住む一人でも多くの人々が賢い選択によって祝福された木の實を心から味わいながら、喜びに満ちあふれる毎日をご過ごしていただきたいと願うのみです。

「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。もし人がわたしにつながっており、またわたしがその人につながっておれば、その人は実を豊かに結ぶようになる。わたしから離れては、あなたがたは何一つできないからである。」（ヨハネ15：5）（やまぐち・かおる）

## アジア北地域に 初めて召された 専任広報宣教師

**19** 96年6月より、専任広報宣教師としてデビッド・T・池上長老とエルシー・M・池上姉妹がアジア

北地域で働くように召された。広報宣教師は、地域会長会の指示の下に、地域広報ディレクター井上龍一兄弟の補

佐として働くことになる。

広報宣教師の受ける責任は多岐にわたり、該当する地域内の一つの国で働くこともあれば、幾つかの国で働くように割り当てを受けることもある。巡回の目的は、(1) ステーク/地方部に広報評議会を組織するよう奨励し、(2) 評議会の構成員に訓練を施し、資料を提供して、(3) 広報活動の実行に際し、指導者や評議会の構成員に対する援助提供者となることである。

# キリストのもとに招く、広報活動

専任広報宣教師

デビッド・T・池上

1954年、ハロルド・B・リー大管長が日本訪問の割り当てを受けて来日した際、日本の新聞が大管長の訪問を採り上げ、次のように報道したことがありました。「末日聖徒イエス・キリスト教会の指導者、来日する。同教会は多妻結婚を奉じる宗派である。……」この記事に、わたしたちは驚き、落胆しました。宣教師たちはこのような誤報を悲しみました。不確かな筋からの情報を、記者があたかも真実のように書いたのでしょうか。わたしたちは、記述の撤回を求めても迅速な

対応はしてくれないだろうと考え、訂正を求める努力をあきらめてしまいました。

しかし現在は、日本に地域広報事務局が組織されており、わたしたちはこのような誤報を避けるために努めています。広報事務局は、新聞報道を扱うために、また教会に関する情報を適切に伝達するために組織されました。地域広報ディレクターである井上龍一兄弟は、広報評議会のメンバーたちとともにすばらしい働きをしています。

わたしたちの使命は、広報事務局を助けて、すべての人がキリストのもとに来て、キリストによって完全となるよう招くという教会の目的を果たすこ

となのです。行政機関に働きかけて、家庭がわたしたちの人生できわめて大切なものであることを訴えるために、あらゆる努力をするつもりです。そしてさらに、これまであまり重要視されていなかったことですが、ほかの宗教、宗派にも働きかけるよう積極的に努力をしていくつもりです。教会員でない人々と接するとき、この責任がとて重く感じられることもあるでしょう。教会と関連のない人々に影響を及ぼすには、配慮の行き届いた努力が必要になるからです。

今は新しい時代であり、広報活動を積極的に展開していかなくてはなりません。この目的のために皆さんと密接に協力しながら働いていけますようお願いしています。また、主の祝福がわたしたちすべてのうえにあって、これらの目的を達成できるように祈っています。□



池上長老ご夫妻

テモテへの第二の手紙第1章9節は、わたしたちが主より召されていることを思い起こさせてくれる聖句です。「神はわたしたちを救い、聖なる招きをもって召して下さったのであるが、それは、わたしたちのわざによるのではなく、神ご自身の計画に基き、また、永遠の昔にキリスト・イエスにあってわたしたちに賜わっていた恵み〔によるのである。〕」

主のぶどう園の一部であるこの地域が地域社会やメディアを通してさらに開かれるよう主の器として働くためにわたしたちはこの地に来ました。パプテスマのヨハネがキリストの先駆者であったように、わたしたちも宣教師の先駆者となり、彼らが働きやすくなるようにしたいと思います。

日本でこの召しを受ける最初の宣教師となれたことをうれしく思います。主が道を備えてくださることを思うと、安らぎを感じ、最善を尽くそうという気持ちになります。きっと成功を見ることができるとは思っています。多くの人々と接し、いつまでもおつきあいできる友達をたくさん作りたと思っています。□

## 宣教師の先駆者として

専任広報宣教師

エルシー・M・池上

わたしたちはかつて東京神殿で1年半の間、宣教師として働く機会

にあずかりました。そして日本を離れるときに、まさか3年半後に再び日本に戻って来て、広報宣教師として働くことになるとは思いませんでした。

# 完成したつくばワード教会堂

——「主はこの教会を自ら導いておられる」——



あひこ  
我孫子ステーク  
つくばワード監督  
東 光明

「主はやはりこの教会を自ら導いておられる。」わたしは、赤松成次郎ステーク会長からの電話を受けてすぐにそう感じました。その電話は、教会堂のための土地が、つくばの北の方に決まったことを知らせるものでした。

つくばワードが牛久ワードから分かれてすぐに新しい教会堂を建てるための申請がなされ、土地を探し始めてからもう1年以上たっていました。新しく監督に召され、前任の佐藤監督から土地探しを引き継いだときには、すでに幾つかの物件が教会管理本部に提案されていました。けれども土地はなかなか決まりませんでした。神権役員会や監督会では、主の望まれる土地についての話し合いが幾度となく行われました。その中で監督会は一致して「もう少し北の方……」という思いを受けていました。

つくばワードは、ほかの多くのワードや支部と違って、近くに電車の駅のない不便な所にあります。そのため、多くの教会員は車で教会に集っています。あと5、6年すると、常磐新線が開通することが決まってはいるものの、まだまだ先の話です。そのため土地探しは、バスの便が頻繁にあるバス停近くという条件で行われました。しかしバスの通りのよい所は、当然土地の値段が高いために手の出ない所が多く、土地探しは難航していました。

教会の土地探しは、地元が大体の範囲を示し、教会管理本部の方が不動産屋を使って探すという方法が取られま

す。そのときの土地探しの範囲は、つくばの南方面に限られていました。そうしている中で、「ほほ、一つの土地が決まった」という知らせを受けました。その土地は、そのとき借りていた建物の近くで、つくばの南の方にありました。その知らせを受けたとき、わたしは「とうとう決まったか」という気持ちの反面、「これでよいのだろうか」という思いがありました。「もう少し北の方……」という思いは何だったのでしょうか。わたしはステーク会長に、もし主の御心なら決まるでしょ

うと答えて電話を切りました。

それからはソルトレークの管理本部からの承認を待つことになります。しばらくして、以前にお願いしていた不動産屋から電話があり、つくばの北方に条件に合いそうな土地があるという連絡を受けました。わたしは、北方という言葉に引かれ、とりあえず見せてもらうことにしました。住宅公園によって新しく整備された、筑波山がよく見える良さそうな土地でした。筑波大学近くの最寄りのバス停から歩いて10分。これならインスティテュートにも英会話にも、多くの学生が参加できそうです。バスの頻度は、1時間に4、5本。申し分のない物件でした。それでも不動産屋には「もうすでに決まっているようですが、相談してみます」と答えてその場を後にしました。

次の日、ステーク会長から電話があ



つくばワードの教会員

り、あの南の土地は、持ち主の考えが変わってだめになったということでした。それで前日に見つかった土地のことをお伝えすると、それはいいということになり、その後多少のうよ曲折はあったものの、最終的に今の教会堂が建っている土地に決まったのです。

主は確かに生きておられ、末日聖徒イエス・キリスト教会を導いておられます。わたしたちが心の中に告げられる導きに従うときに、大きな祝福が得られることを証します。「あなたは謙遜でありなさい。そうすれば、主なるあなたの神は手を引いてあなたを導き、あなたの祈りに答えを与えるであろう。」(教義と聖約112:10)

新しい教会堂を頂いて集会ができることを心から感謝しています。わたしたちのチャレンジはこれからです。つくばの地で主の業を大きく推し進められるように、皆で力を合わせて頑張りたいと思います。(ひがし・みつあき)

**あひこ  
我孫子ステーキ  
つくばワード**

所在地 〒305 茨城県つくば市  
桜2丁目35-2  
電話 0298-57-9795  
竣工日 1996年4月28日  
敷地面積 774.00㎡  
建築面積 194.61㎡  
延床面積 536.79㎡

## 4年間のセミナー教師の責任を終えて

神戸ステーキ北六甲支部  
大嶋陽子

4年間、青少年たちとともに朝6時から福音を学び、金曜日には活動や奉仕を行ってきました。最高の責任、機会を与えられたと感謝でいっぱいです。

素直な青少年たち、彼らを全面的に支援して下さるご両親、最寄りの駅から我が家まで交替で送迎して下さる兄弟姉妹(彼らは自分の子供がこの中にいなくとも、セミナープログラムの証を持ち、当番に当たる人は朝5時半には家を出ている)、また教師を指導して下さる教育部の兄弟たち、これらの人々の中で、また最良の環境の中で責任を果たさせていただきまし

た。確かに毎日のレッスンの準備や送迎、我が家の6人の子供たちとのかわり、さらに仕事を持っていましたので決して容易な責任ではありませんでした。主人や我が家の子供たちの助けなしには成し遂げられなかったことで

### 大震災の中でのセミナー

4年目を迎えた昨年1月17日、阪神

大震災が起こりました。わたしたち家族も7か月間、我が家を離れました。ご親切なある教会員の留守宅をお借りしての仮の住居となりました。教会堂を持たない北六甲支部は、宣教師の家でセミナーをやらせてもらうことになりました。わたしたちも、そこまで行くのに車で30分かかります。ところが帰りは、地震の影響ですごい渋滞の道路を1時間以上、時には1時間半もかかって帰らなければなりませんでした。我が家には中2、小1の子供もいます。彼らが学校に出かけるまでに帰り着くことができないのです。それを次女、三女が助け、主人も度々代わってレッスンを引き受けてくれました。

神様は高い天に座し、すべてを統治しておられ、またすべてを御存じです。必要な出来事、必要な人、必要な物を必要なときに与えて下さると実感しました。まさにニーファイが言うように「それを成し遂げられるように主によって道が備えられて」いるのは事実です(1ニーファイ3:7)。

また仕事柄、この世的な考えの強い人々に接するわたしにとって、毎朝主の御言葉を学び、教えることにより、イエス・キリストの福音が自分自身の利益となり、知識となって(1ニーファイ19:23参照)訓練されてきたことがよく分かります。

### 4人が4年間の皆勤

青少年も受験やクラブ活動、生徒会活動、塾、また体調や自分の弱さなどに悩み、葛藤し、克服していきました。仲間を支えられ、両親、教師に励まされ、神様に頼り信仰を深めていきました。4年間に実質15人(累積29人)の青少年と接してきました。この4年間で卒業していったのは7人、驚くべきことにこの7人中、4人が4年間の皆勤、二人が精勤でした。

セミナーで最もわたしが彼らに伝えたかったのは次のことです。リーハ



昨年のセミナーフェスティバルから。大嶋陽子姉妹(右から二人目)と北六甲支部セミナーの生徒たち。

イは夢で主から示現を受けました。彼は命の木の実を食べ、今まで食べたどんな実より甘かったので家族にも食べさせたいと思いました。それは神の愛を象徴していました。つまり天父がこの地上に大切な独り子、イエス・キリストを送ってくださり、御子を信じる者が一人も滅びないで永遠の命を得られるようにして下さったことなのです。その木の実を味わうための方法は、鉄の棒につかまって突き進むことでした(1ニーファイ8-10章参照)。

わたしはこのセミナーを通して彼らが一生この鉄の棒につかまって突き進んでくれるように、そしてイエス・キリストこそわたしたちの救い主であり、彼に頼って最後まで堪え忍び、永遠の命を得たいという望みの一端を、セミナーを通じて得てほしいと強く願いました。

わたしの力の足りないところが多かったでしょうに、彼らはわたしにたくさん<sup>あかし</sup>の証を与えてくれました。この経験はわたしの生涯の宝、支えとなっていくと確信しております。

### 神の武具を身につけるために

セミナーの8か月間には、山があり谷があります。谷のとき、わたしはレッスンを止めて、彼らにぶつかっていくことが何度かありました。初め、彼らは腹を立てているのですが、わたしの言うことをよく考え、神様の望んでいらっしゃる姿に立ち帰ろうと努力してくれました。そんな彼らを見ると、やはり彼らは確かに末日のために選び抜かれた霊であり、偉大な秘めた宝を持つ神の子であると強く感じる事ができました。彼らの感受性、正しいことを吸収する力、聖句を自分たちに当てはめようとする姿勢、仲間への純粋な愛、従順をこれからも磨き続けていってほしいものです。

わたしは、もっともっと多くの青少年が早朝セミナーを受け、その実の甘さを味わっていただきたいと心から申し上げたいのです。今、サタンは青少年たちを虎視眈々<sup>こしとんたん</sup>とねらっているのが分かります。

毎朝毎朝、聖文をともに学び、証を強め合い、日々世に出て行くのはまさ

に神様の武具(エペソ6:13-17参照)を身につけることになるのです。セミナープログラムは確かに主が中学3年から高校3年までの若人に与

えられたすばらしい贈り物であると証します。(おおしま・ようこ ステーク扶助協会会長)

## セミナーの仲間を励みに ——「キリストの言葉はあなたがたがすべきことをすべて告げる」——



神戸ステーク  
北六甲支部  
大嶋直人  
(高校2年生)

昨年、高校に入学しました。セミナーが開かれる場所も、ほくの家から宣教師の家になりました。それに加えて地震の影響で、鈴蘭台の方に住むことになり、学校まで片道2時間から2時間半かかるようになりました。そのために朝5時に起きてセミナーへ行き、そのまま登校します。

放課後のクラブ活動を終えて帰宅するのは、9時半か10時だったので、体がついていくか心配でした。でもセミナーは神様のプログラムだから、ニーファイ第一書第3章7節にあるように、神様が言われたことには前もってある方法が備えてあると信じて頑張ってきました。

セミナーも学校も1日も休まずに出席できたことを感謝しています。これは自分の力でできたのではなく、神様の力に頼り、いろいろな人の助けがあつてできたことです。また、セミナーを受ける仲間がいたことに感謝しています。仲間みんなが、それぞれに大変なことを乗り越えているので「自分だけが苦勞しているんじゃない。みんなも頑張っている」と思うと励みになりました。また仲間からもたくさん<sup>あかし</sup>のことを学び、楽しく過ごせました。

昨年は『モルモン書』から学びましたが、ジョセフ・スミスに感謝してい

ます。彼は14歳で真実の教会を求めて真剣に悩み、森に入って祈りました。そこで天父と御子イエス・キリストにまみえ、答えを得ました。また、17歳で金版を受け取り、命がけで翻訳を始めました。ニーファイも、<sup>しんちゆう</sup>真鍮の版をラバンを殺してまで手に入れました。また、ニーファイ人でもただ一人生き残ったモロナイは、命をねらわれているにもかかわらず、金版にほくたちへのメッセージを書いてくれました。

でも、ほくたちは自分の努力だけで聖文をいつでも読めます。「わたしは、キリストの言葉をよく味わうようにあなたがたに言った。見よ、キリストの言葉はあなたがたがすべきことをすべて告げるからである」(2ニーファイ32:3)とあるように、もっとキリストの言葉をよく味わい、「すべての聖文を……自分たちの利益となり、知識となるように」(1ニーファイ19:23)との言葉のように、聖句を自分に当てはめていきたいです。

今四大聖典が与えられていること、またそれらをセミナーを通して学べることに感謝しています。ほくたちは、末日にとっておかれた霊だとしてよく言われます。もっと聖文を学び、考え、祈って生活に生かし、証を得て自分に期待されていることを知りたいです。

セミナーによって証が<sup>あかし</sup>強められたこと、教えてくれた教師、場所を提供してくれた宣教師、送り迎えをしてくれた兄弟、姉妹に感謝しています。(おおしま・なおと)

## ぼくたちのセミナー



神戸ステーク  
北六甲支部  
升山 忍  
(高校3年生)

信じている、思っている、いつか天に帰ろう  
思い出す、感謝する、あの4年が喜べる、生きている  
繰り返される日々の中のほんの一瞬でも

「今日」というすばらしい日が始まる

朝早くセミナーに行くことで  
ぼくたちはふと気づいた  
過去と比べて大きく変わったと  
いつの日か福音を伝えるため  
4年間備えている  
主の愛を受けながら

ずっと今日まで生きてきたのは  
あなたたちに会うためと今は思える  
生まれる前の約束は  
こうしてあなたに福音を話すこと  
歩いている、笑っている、今あなたと

時がぼくらを連れ去っても  
神の業は変わらない  
ずっとずっと……

祈りと聖文は大きな武器  
世の中の誘惑に決して負けたくない  
信じている、愛している、希望を持っている  
大切な事ばかり教えてくれたセミナー  
そして今、役に立つ、友を導く  
信じている、愛している  
大きな世界の中で出会えた  
小さなみんなの奇跡  
(ますやま・しのぶ)

## 人生を変えた1枚のちらし



神戸ステーク  
北六甲支部  
長谷川北斗  
(高校1年生)

ある日、父が犬の散歩に行ったとき、1枚のちらしを見つけました。それには「アンモン」英会話と書かれていました。ぼくはとても成績が悪くて、正直に言うと悪いことばかりしていました。だけど、その1枚のちらしがぼくの人生を変えてくれたのです。

最初、英会話なんて行きたくないと思っていましたが、だんだん楽しくなり、ずっと出席していると突然外国人がキリスト教に入らんかと言ってきて、レッスンを受けるようにな

りました。それからバプテスマを受け、そして、セミナーに出席することになりました。最初は、朝から勉強して何が楽しいんだろうと思っていました。しかし、大嶋姉妹にその楽しさを教えてもらいました。それからセミナーのお友達にも。教会に入ってから、こんなにいい人が日本にいるんだなーと思いました。

もし父が、あの1枚のちらしを見つけてこなかったら、ぼくは、家族や他の人に迷惑ばかりかけていたでしょう。大嶋姉妹、そして皆さん、ほんとうにありがとうございました。これからもセミナーに行きたいと思います。それからもっと信仰を強めたいです。  
(はせがわ・ほくと)

\*

## 神殿宣教師 の紹介

- ①氏名
- ②任命日
- ③出身ユニット



①北野智之、真佐子  
②1996年9月  
③名古屋M/石川D/小松B



①黒木三千夫、和子  
②1996年9月  
③福岡M/鹿児島D/宮崎B



①吉岡公夫、美津子  
②1996年9月  
③東京北S/中野W

# 9月に召された専任宣教師

第204期生 14人



前列左から 1-5, 後列左から 6-14

〈名 前〉	〈出身地〉	〈伝道地〉
1. 大川 徹也	福岡S / 佐賀B	神戸伝道部
2. 松岡 弘道	大阪S / 関目B	東京南伝道部
3. 吉田 久	大阪堺S / 三国ヶ丘W	東京北伝道部
4. 兒玉 健一	神戸S / 姫路W	東京南伝道部
5. 深沢 純	京都S / 下鴨W	福岡伝道部
6. 高江あゆみ	福岡S / 佐賀B	仙台伝道部
7. 高橋里実	アメリカ・バーズビルS / ブルーミントンW	仙台伝道部
8. 秋原里美	東京北S / 浦和W	神戸伝道部
9. 真鍋典子	岡山M / 山口D / 宇部B	東京北伝道部
10. 馬渡順子	大阪S / 枚方W	福岡伝道部
11. 梅田寛子	名古屋S / 名東南W	福岡伝道部
12. 辻 智美	札幌西S / 新琴似W	福岡伝道部
13. 本田佐知子	町田S / 町田第一W	札幌伝道部
14. 中野扶美	大阪S / 大阪W	東京南伝道部

S : ステーキ, M : 伝道部, D : 地方部, W : ワード, B : 支部

## 価格改定のお知らせ

『聖書』(口語訳・日本聖書協会発行)  
86201 300 小型 (A6判)  
2,100円 → **2,400円** (9月17日付けで改定)

## 役員の変動

1996年8月16日から1996年9月13日まで  
に管理本部会員統計記録課に通知のあ  
った役員の変動(敬称略)

- 福岡伝道部鹿児島地方部長  
山口 薫
- 仙台伝道部秋田地方部酒田支部長  
阿部純三
- 東京北伝道部長野地方部松本支部長  
増井重治
- 大阪東ステーキ吹田ワード監督  
白保文雄

## ユニットの合併

名古屋伝道部福井地方部の敦賀支部は、7  
月10日付けで閉鎖され、武生支部と合併。

## 皆さんの原稿を 募集しています

◎ご投稿の際には連絡先(住所、電話  
番号)、教会での責任(役職名)、所属  
ユニット名を記入し、写真を同封のう  
えお送りください。原稿は一部手直し  
させていただくことがあります。

◎お願い——海外に召される日本人宣  
教師たちを紹介いたします。伝道の召しを  
受け取り次第、編集室に写真を添えてお  
知らせください。(氏名〔フリガナ〕、伝  
道部名、召された年月を明記)

◎あて先: ☎106 東京都港区南麻布5-  
10-30 末日聖徒イエス・キリスト教会  
『聖徒の道』編集室

☎03(3440)2666 FAX 03(3440)3275

## 海外に召された日本人宣教師



佐瀬由美子  
オーストラリア・  
シドニー北伝道部  
1996年10月  
我孫子S / 松戸W出身



佃 美朋  
ソルトレーク・シティー伝  
道部  
1996年3月  
東京東S / 千葉W出身



梅原ゆかり  
ソルトレーク・テンブルスクウェア  
訪問者センター伝道部  
1996年10月  
東京東S / 鎌ヶ谷W出身

**おわびと訂正** 10月号ローカルページの満100歳を祝う金箱光枝姉妹 (p.15) の名前は、金箱光恵姉妹の誤りです。おわびして訂正いたします。

# 9月に召された専任宣教師

第204期生 14人



前列左から1-5, 後列左から6-14

〈名前〉	〈出身地〉	〈伝道地〉
1. 大川 徹也	福岡S / 佐賀B	神戸伝道部
2. 松岡 弘道	大阪S / 関目B	東京南伝道部
3. 吉田 久	大阪堺S / 三国ヶ丘W	東京北伝道部
4. 兒玉 健一	神戸S / 姫路W	東京南伝道部
5. 深沢 純	京都S / 下鴨W	福岡伝道部
6. 高江あゆみ	福岡S / 佐賀B	仙台伝道部
7. 高橋 里実	アメリカ・バーズビルS / ブルーミントンW	仙台伝道部
8. 萩原 里美	東京北S / 浦和W	神戸伝道部
9. 真鍋 典子	岡山M / 山口D / 宇部B	東京北伝道部
10. 馬渡 順子	大阪S / 枚方W	福岡伝道部
11. 梅田 寛子	名古屋S / 名東南W	福岡伝道部
12. 辻 智美	札幌西S / 新琴似W	福岡伝道部
13. 本田 佐知子	町田S / 町田第一W	札幌伝道部
14. 中野 扶美	大阪S / 大阪W	東京南伝道部

S : ステーク, M : 伝道部, D : 地方部, W : ワード, B : 支部

## 価格改定のお知らせ

『聖書』(口語訳・日本聖書協会発行)  
86201 300 小型 (A6判)  
2,100円→2,400円 (9月17日付けで改定)

## 役員の変動

1996年8月16日から1996年9月13日まで  
に管理本部会員統計記録課に通知のあ  
った役員の変動(敬称略)

- 福岡伝道部鹿児島地方部長  
山口 薫
- 仙台伝道部秋田地方部酒田支部長  
阿部純三
- 東京北伝道部長野地方部松本支部長  
増井重治
- 大阪東ステーク吹田ワード監督  
白保文雄

## ユニットの合併

名古屋伝道部福井地方部の敦賀支部は、7  
月10日付けで閉鎖され、武生支部と合併。

## 皆さんの原稿を 募集しています

◎ご投稿の際には連絡先(住所、電話  
番号)、教会での責任(役職名)、所属  
ユニット名を記入し、写真を同封のう  
えお送りください。原稿は一部手直し  
させていただくことがあります。

◎お願い——海外に召される日本人宣  
教師たちを紹介いたします。伝道の召しを  
受け取り次第、編集室に写真を添えてお  
知らせください。(氏名〔フリガナ〕、伝  
道部名、召された年月を明記)

◎あて先: ☎106 東京都港区南麻布5-  
10-30 末日聖徒イエス・キリスト教会  
『聖徒の道』編集室

☎03(3440)2666 FAX 03(3440)3275

## 海外に召された日本人宣教師



佐瀬由美子  
オーストラリア・  
シドニー北伝道部  
1996年10月  
あびこ  
我孫子S / 松戸W出身



つくだ みほう  
佃 美朋  
ソルトレーク・シティー伝  
道部  
1996年3月  
東京東S / 千葉W出身



うめはら  
梅原 ゆかり  
ソルトレーク・テンブルスクウェア  
訪問者センター伝道部  
1996年10月  
東京東S / 鎌ヶ谷W出身

**おわびと訂正** 10月号ローカルページの満100歳を祝う金箱光枝姉妹(p.15)の名前は、金箱光恵姉妹の誤りです。おわびして訂正いたします。